

徳川美術館の美術品疎開

香山里 絵

はじめに

- 一 名古屋空襲と徳川園及び大曾根邸の全焼
- 二 上伊那図書館及び三澤倉庫に関して
- 三 疎開経過
- 四 閣議決定と文部省教学局の関与
おわりに

はじめに

第二次世界大戦の戦況が悪化する昭和十九年（一九四四）から二十年にかけて、財団法人尾張徳川黎明会（現在の公益財団法人徳川黎明会、以下「徳川黎明会」と略称する）は、名古屋 徳川美術館、東京 蓬左文庫（昭和二十五年名古屋市譲渡）に保管していた尾張徳川家伝来の美術品、貴重書を長野県伊那市の私立図書館、財団法人上伊那図書館及び同図書館近くの三澤良信所有の倉庫に疎開させた。本疎開については既に『徳川林政史研究所研究紀

徳川美術館の美術品疎開

要』第三十四号に徳川林政史研究所研究員須田肇が一部の資料を紹介しているが、そこに紹介された内容は十分ではない。^①本稿では須田が言及している疎開全期間に亘って上伊那図書館宿直が記した日誌に加え、上伊那図書館側の日誌、東京の総務部（財団本部）、名古屋の美術館、伊那の疎開先との連絡に使用された三百通を超す往復文書等の資料を精査の上、この美術品疎開の全体像把握を試みる。^②

本論に入る前提として当時の徳川黎明会の組織と役職について述べておく。徳川黎明会は昭和六年十二月に一部三機関一室（総務部、徳川生物学研究所、徳川美術館、蓬左文庫、蓬左文庫附属徳川林政史研究室）の組織として設立され、十五年近く経過した日本参戦時にあっても設立時と同じく、会長―尾張徳川家第十九代当主徳川義親、副会長―義親長男徳川義知（後の尾張徳川家第二十代当主）、専務理事―尾張徳川家家令鈴木信吉、常務理事（総務部長兼任）―尾張徳川家家扶五味末吉を中心に運営されていた。尾張徳川家と財団の運営は必ずしも分離しておらず、書類や書簡において役職者は尾張徳川家と財団での両役職名で呼ばれている。肩書の使用は時にその文書

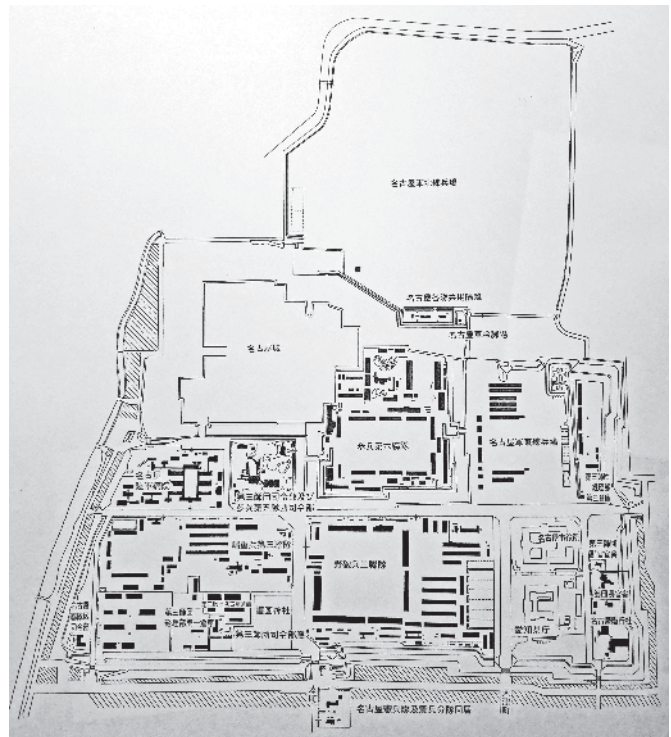
がいずれに属するかを示す場合もあるが、疎開事業は資金面を含む様々な側面で徳川家の援助を受けており肩書が混在、本論においても両者が混在する。また美術館、蓬左文庫は「主任」を長とする組織であり、美術館主任近藤真太郎は尾張徳川家大曾根別邸主任を兼任、蓬左文庫主任は東京帝国大学図書館司書、名古屋図書館司書等の経歴を経た森川鉉二が務めていた。

尚、須田論文では、同財団徳川林政史研究室（現在の徳川林政史研究所）研究資料の疎開にも触れているが、これらの資料は美術品、貴重書とは全く別経緯で木曾教育会預託となることから、本論では言及しない。

一 名古屋空襲と徳川園及び大曾根邸の全焼

徳川美術館が所在する名古屋は、日本でも有数の空襲が激しかった地域である。第二次世界大戦前、名古屋は航空機産業の中心地として知られ、軍需工場が点在していた。戦後のアメリカ合衆国戦略爆撃調査団報告によれば、工場は①名古屋市の南半分、名古屋港の北および周辺の一五平方マイルほどの地域（熱田区、港区、南区）と②北端二マイルの幅で東西にのびる三日月状の地域（東区、北区）に集中し、主要工場として、航空機十一、兵器十一、金属及び金属製造十五、電気機械器具三、造船一、その他三の計四十四工場が爆撃目標として確認されていた。⁽³⁾ また名古屋城は明治四年（一八七二）に尾張徳川家が退去した後、名古屋鎮台が置かれ陸軍省所轄とされた。同二十六年に本丸は宮内省に移管され名古屋離宮とされたが、旧二之丸をはじめとする場所には陸軍第三師団が置かれていた（挿図一）。

徳川美術館は明治二十六年（一八九三）から大正九年（一九二〇）まで尾張徳



挿図1 名城郭内第3師団司令部周辺旧軍施設図（昭和20年当時）

川家本邸として使用された名古屋大曾根邸敷地内に、昭和十年（一九三五）に開館した。宅地一〇、七九二坪、田四町、畑九町、山林五町という広大な敷地を有した大曾根邸は、明治二十六年尾張徳川家十八代義禮（一八三〇～一九〇八）が東京から転居するにあたり整備され、東京横網町邸から三階建ての小座敷が移築、また明治三十三年には久留正道設計の大建物が竣工した。⁽⁴⁾ しかし、義禮逝去に伴い家督を継承した義親（一八八六～一九七〇）は未だ学生の身分であり、大学に通う都合上、名古屋に暮らすことは出来ず、またその後も名古屋に暮らすことを選択しなかった。大正九年八月、

義親は本籍を東京 麻布富士見町邸に移して名古屋大曾根邸を別邸と位置づけ、昭和五年十一月、徳川美術館設立と大曾根邸の名古屋市内寄贈を発表した。大曾根邸は徳川美術館建設用地、義親が来名の際に宿泊するための小規模な大曾根別邸、そして名古屋市内へ寄贈された「徳川園」に三分割された。⁽⁶⁾ 総面積八、六六一坪二二八、六三二平方メートルの徳川園には、表書院、奥書院、洋館二棟、小座敷等義禮の過ごした空間である建坪三八〇坪七合の「本館」と清流軒があった。清流軒は尾張徳川家二代光友が誕生したとされる建物であり、江戸時代を通じて守られてきた。庭園は鬱蒼と木々が茂り旧名古屋城二之丸庭園の庭石を譲りうけた奇岩巨石が配置されていた。⁽⁷⁾

徳川美術館を含むこの徳川園周辺は、大曾根邸所縁の木々が茂る緑豊かな地域であり、黒門前には桜菊女学園がある文教地域であった。しかし中央線をはさんで東側はアメリカ軍爆撃調査団報告にある②の地域にあたり、兵器廠があり工場が集中していた(挿図2)。

美術館の立地が安全な場所ではないことを認識していたからであろう、徳川黎明会は日本参戦前から疎開を検討した。また美術館建物の偽装工作も早くから準備され、昭和二十年初頭には徳川美術館外壁は迷彩柄に塗られていた。⁽⁸⁾

昭和十九年十二月に始まった名古屋空襲は十二月中は三菱発動機、三菱航空機等の軍需工場破壊を目的としていた。しかし昭和二十年一月以降空襲は軍施設、軍需工場を狙う目標爆撃のみではなく地域爆撃も加えられた。⁽⁹⁾ 一月十七日、名古屋の責任者である近藤は鈴木家令への手紙に「十四日数編隊による空襲以来殆ど毎日の様に警報発せられ、真に枕を高くして寝得ざる情況、(中略)加ふるに当地方は去る十三日の強大なる地震の余震、



挿図2 徳川園、徳川美術館周辺図(昭和12年)

相当に回数多く、時には住民戸外に走り出す程度のもの少からず候、実に空からと地からと双方より脅威を受けつつある次第に候」空襲は常に高々度よりの投弾、殆ど盲爆の有様にして、被害者は運悪く之が犠牲とならん、実に御気の毒に堪へず候」と記している。⁽¹⁰⁾十二月七日の昭和東南海地震に続き、一月十三日には三河地震があった。地震と空襲の両方に襲われる名古屋市民の厳しい状況が想像される。⁽¹¹⁾

名古屋大曾根別邸に最初の被害がでるのは昭和二十年一月二十三日であった。⁽¹²⁾午後二時三十六分から四時ごろにかけて十五、六機の編隊が来襲し高々度より爆弾、焼夷弾を混用投下した。別邸門前の四軒、桜菊女学園幼稚園舎、徳川町二丁目の一軒に爆弾が命中、焼失した。邸内に直接的な被害はなかったが、別邸の西側、南側の硝子障子は割れ、雨戸、玄関の戸障子などが離脱した。また三号倉庫の扉金具が爆風により曲がり、鍵がからなくなった。電燈、電話線等は切断したものの美術館建物及び人的被害はなく、近藤は「一同全員元気旺盛」と報告している。続いて三月二十五日も爆弾の直撃は受けなかったが、爆風により美術館の窓ガラスが大規模に破損、館内に置かれていた展示ケースなども破損した。建中寺の尾張徳川家の墓所には爆弾七個が落下、桜菊女学園建物は全焼した。⁽¹³⁾四月七日、美術館裏の藤棚の東、徳川園中庭及び門前に爆弾落下、爆風により御三階をはじめとする別邸内の建物の多くの天井、壁等が破損し、家職が居住する為に建てられていた役宅は全戸破壊され、暮らすことが出来なくなった。役宅に暮らしていた家族を疎開させ、職員の名多くは美術館内に泊まり込むことになった。⁽¹⁴⁾美術館もシャッターまでが破損し、大修繕を要する状況であった。

そして五月十四日、午前六時二十分に警戒警報発令、七時五十一分空襲

警報と同時に徳川美術館周辺では約二時間の爆撃が続いた。折悪しく、近藤は総務部指示により美術品の疎開する伊那に滞在中であり、美術館と別邸には熊沢五六、野田芳太郎、竹内清三郎、小海途護一の四人しかいなかった。別邸敷地内には数十発の焼夷弾、爆弾が落下した。別邸十九棟、徳川園の本館、清流軒、茶席心空庵ほかの建物は灰燼に帰した。⁽¹⁵⁾尾張徳川家二十一代当主徳川義宣が生前に語っていたところでは、美術館収蔵庫にも爆弾がめりこんだが、不発弾であり奇跡的に助かったという。延焼を免れたのは美術館と倉庫三棟、物置二棟のみであった。翌五月十五日の本邸庶務課、総務部宛の報告は以下の通りである。⁽¹⁶⁾

【資料一】昭和二十年五月十五日 別邸、美術館より本邸庶務課、総務部宛報告

五月十四日午前七時五十一分空襲警報発令と同時に敵機B29約四百機十数編隊を以て西方より侵入し市の北部一円に無差別爆撃を敢行致候、無数の焼夷弾の爲め徳川町一帯は火の海と化し濛々たる黒煙に包まれ、午前八時半頃には美術館及御別邸構内焼夷弾と火の粉により諸所に火災を生ずるに至り、消火に努めたるも、御別邸茶席及心空庵は火の廻り殊に早く遂に及ばず、御三階、壽の間、御膳所、新八帖、旧事務所等烏有に帰し候、幸ひ美術館本館及倉庫、新倉庫、三号及表倉庫、物置等は火の粉を浴び一時危険に瀕したるも無事なるを得申候、尚役宅は焼夷弾雨下し全部焼失仕り残念至極に御座候、何れも吾々の努力足らざる処と申訳無之存居候

追て今回の空襲に依り徳川町(二丁目より七丁目迄)に約十五戸の民家を残し全部焦土と化し、名古屋城天守閣、全御殿、東照宮、徳川園等焼失仕候に付申添候

徳川美術館周辺の徳川町一丁目から七丁目には十五戸の民家しか残らなかった。五月三十一日、大曾根別邸の家職横井壽定雄も大曾根駅西南部は駅から徳川園が見通すことができるほどの焦土となり、その惨状は目も当てられないと鈴木信吉宛に報告している。⁽¹⁷⁾

六月半ば以降、美術館を死守するために、職員全員が館内に起居し、交互に宿直、空襲の際には全員が協力して防衛に専念した。⁽¹⁸⁾二十一日以降七月末日までの名古屋の空襲の様子が詳細に記録されている。⁽¹⁹⁾空襲警報の発令されない日はなく、警報の時間、飛来した飛行機数、飛行場所、美術館内で誰が対応したかを記している。五月十四日以降、残った建物が被災する事はなかったが、美術館の所在する名古屋市東区は面積にして五十四％が焼失した。⁽²⁰⁾徳川美術館は吹き飛んだ扉や割れた窓ガラスに板をはめ込んだ無惨な姿で終戦を迎えた。⁽²¹⁾

徳川美術館館内では疎開出来なかった初音蒔絵調度の三棚をはじめとする美術品が守られていた。国宝、重要美術品でありながら大きさや重量が輸送に適さないと考えられた一部の作品と疎開するまでの価値を認められなかった作品は、美術館地下に防御壁、鉄扉等が整えられ保管されていた。⁽²²⁾

二 上伊那図書館及び三澤倉庫に関して

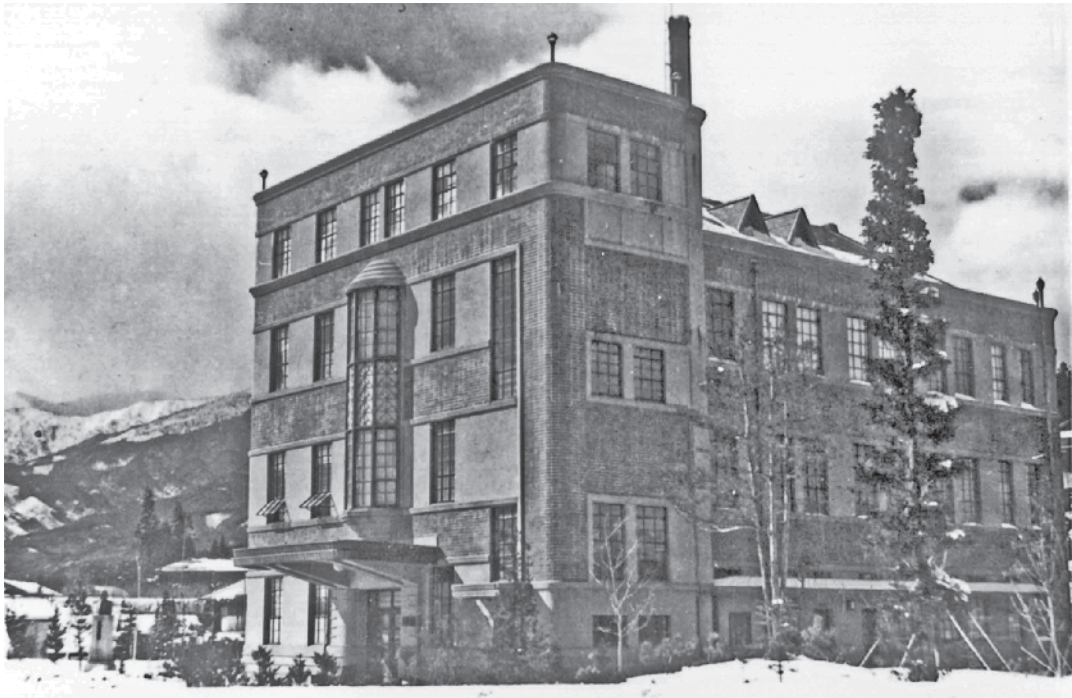
徳川美術館所蔵の美術品及び蓬左文庫所蔵の貴重書は長野県伊那市にある財団法人上伊那図書館と三澤倉庫に疎開した。

財団法人上伊那図書館は、上伊那教育会の長年の悲願を叶え、製糸実業家である武井寛太郎（一八六八―一九四四）⁽²³⁾が十数万円を投じ昭和五年十二月十七日に開館した私立図書館である。設立以前、旧伊那町には明治三十五

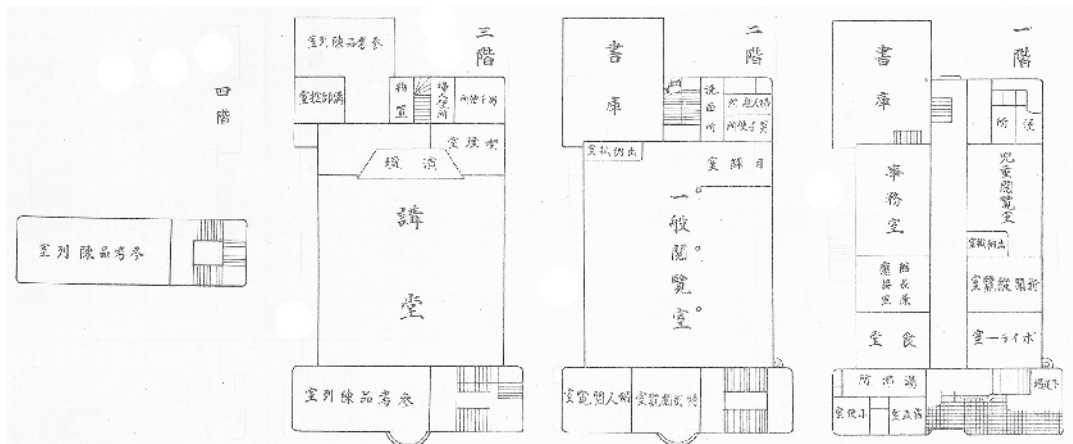
年五月十日に図書館が設立されていたが、その資金は各部落から募集された寄付金と町内小学校職員の拠出金からなり、蔵書はわずか四三三冊であった。上伊那図書館完成の際、この蔵書もすべて提供され、図書館利用者数は昭和六年には延べ一三、七九九人、貸出図書数延べ二五、六一六冊に及び、長野県内でも有数の図書館として知られていた。⁽²⁴⁾

一、六六〇坪の敷地には、森山松之助（一八六九―一九四九）が設計した図案を黒田好造が実施設計した鉄筋コンクリート造三階、一部四階の地上五七尺の洋館が建てられた（挿図3）。建坪三五三・七二坪、高遠焼で作られたスクラッチタイルで外装されており、全館スチーム暖房となっている。一般閲覧室と児童閲覧室に加えて、特別閲覧室、新聞閲覧室、婦人閲覧室もあり、三階には演壇を備えた大きな講堂があることから様々な集會が開催された。また三階と四階に陳列室もあることから展覧会も開催され、伊那における教育、文化の中心として機能していた（挿図4）。⁽²⁵⁾当時貴重であった図書を守るため、書庫は閲覧室等とは別棟で建設され防火壁、防火扉で遮断され、外部から電源が切れる構造となっている。この防火構造は渡辺仁設計、昭和十年開館の東京蓬左文庫建物（現在の公益財団法人徳川黎明会財団本部建物）と近似しており、徳川黎明会関係者にとっては尾張徳川家伝来の貴重書、美術品を預ける場所としての条件を満たしており、且つ親近感を感じた建築物であったと考えられる。

上伊那図書館では、徳川美術館の美術品と蓬左文庫の貴重書は、書庫二階の北側の一部、一般閲覧室北側に新設した格納室に格納され、新設格納室や三澤倉庫の整備が完成するまでの期間、一時的に婦人閲覧室と新聞閲覧室が臨時的に用いられた。⁽²⁶⁾尚、上伊那図書館は他に東京産業大学（現在の一橋大学）メンガー文庫、ギルケ文庫等の疎開を受け入れている。



挿図3 上伊那図書館(創建当時) 伊那市創造館提供



挿図4 上伊那図書館平面図(『上伊那図書館要覧』昭和5年12月) 伊那市創造館提供

上伊那図書館は戦後も私立図書館として存続し、公共的価値が高いことから昭和二十九年(一九五四)四月からは伊那市図書館が上伊那図書館内に置かれ、上伊那図書館が運営していた。建物の老朽化等により平成十四年(二〇〇二)に七十年の歴史に幕を閉じ、建物は伊那市に寄付された。建物は耐震工事などを行った上、現在は伊那市創造館として公開され、上伊那図書館の日誌を含む資料の一部は伊那市創造館に寄贈、保管されている(挿図5)。

また三澤倉庫(挿図6)は伊那町駅の西南約五丁(五五〇メートル弱)の上伊那郡伊那町西町にあり当時三澤良信が所有していた。三澤家は伊那街道の宿駅伊那宿で代々組頭を務め、高遠藩に多額の献金をしたところから門構えが許された家である。天保年間(一八三一―四五)より売薬業を開始、宿場で薬を扱ったのに加え、売り子が薬の入った行李を背負って愛知、静岡、長野を行商、

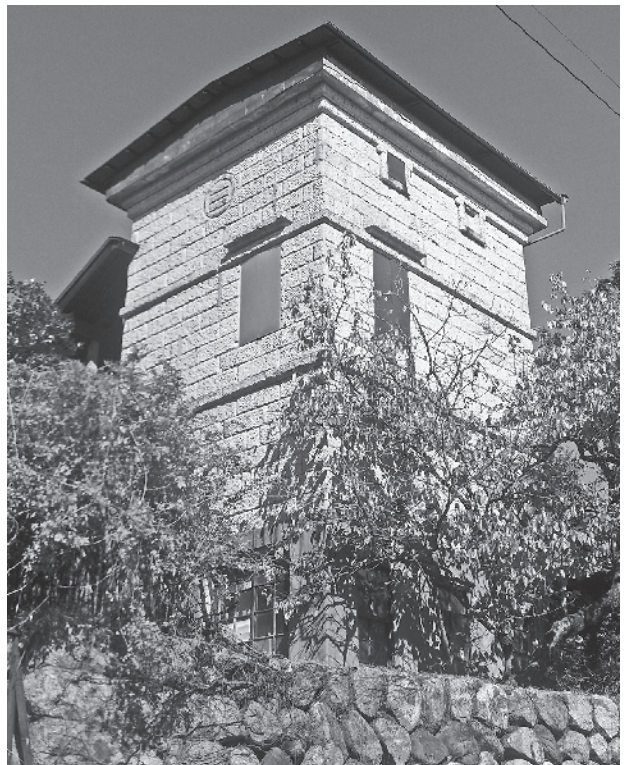


挿図5 旧上伊那図書館書庫(現在の伊那市創造館書庫)

また幕末から大正年間には旅籠も営んでいた。大地主として伊那部宿の有力者となり、明治二十三年(一八九〇)には十代目莊衛が伊那村村長を務め、東京の有名薬店には三澤の薬が並んでいたという。⁽²⁷⁾

三澤良信から倉庫を借用するにあたり、徳川黎明会は上伊那図書館員池上勲の紹介を受けた。⁽²⁸⁾昭和十九年五月十六日の日誌に森川は「三澤良信氏宅を訪問、倉庫を視察す、野州宇都宮在の石造にして完全なるものなり」と記している。⁽²⁹⁾三澤家母屋は川崎に移築され川崎市立日本民家園内にある

徳川美術館の美術品疎開



挿図6 現在の三澤倉庫(長野県伊那市現存)

が、昭和七年頃に作られたという石造の倉庫は伊那に現存している。

三 疎開経過

日本における第二次世界大戦下の美術品疎開は東京帝室博物館での昭和十六年の協議に始まるとされてきた。⁽³⁰⁾後述する通り、東京帝室博物館との密接な関係もあり、徳川黎明会もまた日本が第二次世界大戦に参戦する前である昭和十六年初頭から疎開が検討された。⁽³¹⁾

昭和十六年二月、徳川黎明会は尾張徳川家の墓所のある応夢山定光寺(愛

知県瀬戸市)の経蔵を整備し、そこに疎開させることを決定した。応夢山定光寺は建武三年(一三三六)平心處斎(一二八七―一三七〇)創建の寺院で、尾張徳川家初代徳川義直(一六〇〇―五〇)は生前遊獵の際に定光寺に立ち寄りその景色を愛で、自らの廟所(源敬公廟)をそこに建立する事を決めたといわれる。⁽³²⁾疎開場所候補とされた定光寺経蔵は寛政三年(一七九二)黄檗版大蔵經二一六〇冊を納めるため中興第六世大蓬全葉(一七一九―九二)が建てた。万一火災などの節には仏殿等に安置されている源敬公の位牌をはじめとする大切な品々を経蔵に移動することが代々住職に伝えられ、安全な場所と信じられていた。⁽³³⁾昭和十六年三月に竹中工務店により定光寺の下見が行われ、四月に美術品収蔵に向けた修繕設計図が完成、五月十一日より工事が行われた。⁽³⁵⁾また疎開する美術品目録もこの年五月に完成し、六月三日総務部より認可された。⁽³⁶⁾同年十月十四日には一部の作品を除く第一回疎開品の荷造りが完成した。⁽³⁷⁾このように疎開準備は着々と整えられたが、まだ実際に疎開を実施する必要があるとの判断がなされ、昭和十八年秋まで美術品は館内に留め置かれた。⁽³⁸⁾

昭和十八年十月一日、徳川美術館は「諸事情のため」閉館した。これは九月十八日付常務理事五味末吉から伝えられた決定で、閉館後、展示ケースの大硝子が外されて格納されるなどの防空対策が行われた。⁽³⁹⁾

十月五日美術館で起案された「貴重什宝保護措置要項」前文には以下の通りある。

【資料二】「貴重什宝保護措置要項」昭和十八年十月五日 徳川美術館

昭和十六年春支那事変ノ進展ニ伴ヒ、敵機我本土ヲ空襲スルノ懼アルヲ以テ、美術館所蔵貴重什宝ノ保護ヲ講ズルノ必要ヲ感じ、非常措置ヲ立案シ、之ガ実現ニ着手セリ。即チ美術館貴重什宝ハ、之ヲ定光寺

経蔵(第一候補地)ニ移転格納スル事トシ、全寺ニ交渉シテソノ全意ヲ得テ該経蔵ノ補強工事ヲ施スト共ニ一方美術館貴重什宝ハ目標ヲ附シテ之ヲ區別シ、且容器タル内箱及外箱内夫々ノ間隙ニハ詰物ヲナシ運搬ノ際決シテ破損ノ生ズル事ナキ様ニ荷造ヲナシ何時タリトモ搬出シ得ル様準備ヲ整ヘタリ。

而シテ当時及事後ノ事態ハ直チニ之ヲ搬出格納ノ処置ヲトルノ必要ヲ認メザリシニヨリ、待機ノ状態ニテ現在に至レリ。然ルニ今日状勢ノ変化ハ最早保護措置実行ノ遷延ヲ許サバル情况トナレリ。元来定光寺ノ経蔵ハ名古屋市ヨリ距離稍々遠ク加カモ山上ニアルヲ以テ運搬上ノ不便其他ノ支障少カラザルヲ思ヒ予メ全経蔵以外ノ安全地帯ニ適当ナル倉庫等アラサルカト之ヲ物色セルモ名古屋市周辺ニハ農村ト云ハズ小都市ト云ハズ至ル所軍需品工場、飛行場等点在シテ什宝格納ニ適スル地ナシ、故ニ初頭ノ案ニ從ヒ定光寺経蔵ニ移動格納スルヲ可ナリト信ス。⁽⁴⁰⁾

定光寺は交通の便が悪く、輸送手段がリヤカーしかない中、定光寺までのように安全に疎開するかが課題であった。リヤカーでは美術館―定光寺間は一日一往復が限度であった。⁽⁴¹⁾また湿度の高い場所であり、様々な対策を行ったにもかかわらず庫内湿度は一〇〇パーセント近くを推移していた。⁽⁴²⁾要項には続いて「天明以来百五十年に涉りて数百巻の経巻を収納し之を保全したる事実より推測して彼の恐るべき湿気の害にも先づ堪ふべきものなりと看做すを得べし」と記している。輸送手段と湿度の問題を抱えながらも別の疎開先が見つからないことから、やむなく疎開先は定光寺とされていたと思われる。

十一月、徳川美術館とは別に蓬左文庫貴重書の疎開先を探していた森川

が長野方面の図書館の視察を終えて帰京した。森川は後述する通り、疎開場所を検討するにあたり東京帝国図書館館長松本喜一（二八八一―一九四五）に話を聞き、上伊那図書館を含む数館の推薦を受けていた。十一月二十四日森川は直接上伊那図書館を訪れ、施設が予想より大きく堅牢で疎開に適した理想的環境であることを確認、すぐに貴重書預託を図書館に依頼し、内諾を得た。⁽⁴³⁾ 森川からこの連絡を受けた専務理事鈴木信吉は同日近藤に、森川が疎開先として上伊那図書館を見つけてきたが、美術館の美術品も上伊那図書館に疎開させないかと提案している。⁽⁴⁴⁾ 近藤も同意し、徳川美術館美術品の上伊那図書館への疎開はすぐに決定した。この受け入れにつき、財団法人上伊那図書館理事会では一年あまり後の昭和十九年十二月十三日に以下の通り報告されている。

【資料三】財団法人上伊那図書館理事会 昭和十九年十二月十三日

昭和十八年十一月、蓬左文庫主任森川氏来館、同文庫、徳川美術館の重要品（国宝・重要美術品・其他）疎開につき、本館の一部を借用方申込あり。国内の情勢及美術品の重要性、図書館の新使命等を考慮し、書庫二階の北側を貸与することとし、其後同会の専務理事鈴木氏、同常務理事五味氏来館、正式に貸与することとせり。⁽⁴⁵⁾

徳川美術館所蔵品の上伊那図書館への疎開は機密事項とされ、移動日程が決まるまで美術館では近藤以外には知らされず、後述する文部省教学局の問い合わせに対しても返答されなかった。⁽⁴⁶⁾

徳川美術館美術品は昭和十九年から二十年に三次四回に分けて鉄道輸送により伊那に送られた（表1）。

〈第一次疎開〉

第一次疎開品として国宝、重要美術品を中心とする徳川美術館の最重

要作品が選ばれ十一個に梱包され移動された。荷箱外側には上下を明示し、取扱注意、濡物用心の赤札が貼られた。荷札は送り先を秘密とするため、日本通運株式会社に貨物を引き渡す時に間違いのないよう複数貼られた。積込列車は各駅の発着時間が調べられ、また発着駅長、名古屋運輸事務所長はかに連絡されていた。⁽⁴⁷⁾ 昭和十九年三月十九日朝、美術館から手車七輦で搬出、九時半に大曾根駅で貸切貨車に積載、施錠封印の上、午後二時三十九分日本通運株式会社名古屋支社宮本義雄護送の下、貨車は発車した。翌朝二十日八時伊那町駅に到着、前日伊那入りした近藤、熊沢と東京から当日駆け付けた森川、図書館員が手車二輦に付き添って往復し、十一個は夕方までに無事上伊那図書館書庫に格納された。⁽⁴⁸⁾

第一次疎開終了後、伊那での管理方法を検討する為、近藤と森川両主任が伊那に残り手筈を整えた。⁽⁴⁹⁾ 上伊那図書館と協議の上、図書館司書の中村弥紋太が三月二十一日徳川黎明会囑託に任命された。⁽⁵⁰⁾ 美術館と蓬左文庫から交代で一人が派遣され、中村とあわせて昼間には二人が、夜間は図書館側の警備に任せることとなった。宿直は森川と美術館職員熊沢五六、野田芳太郎が十五日毎に交代で伊那に滞在することとされ、宿直者の常宿は扇子屋旅館とされ、昼食も旅館で準備してもらうこととなった。⁽⁵¹⁾

このような手筈を整えて三月二十六日森川は一度帰京、三月三十一日に蓬左文庫所蔵の貴重書八十箱を発送し、四月一日に森川、近藤両主任立会の下、蓬左文庫第一次疎開の貴重書は上伊那図書館に無事格納された。蓬左文庫第二次疎開は伊那木工有限会社により伊那で箱の準備がなされてその箱に詰められ、八月四日に東京から発送、六日に格納された。⁽⁵²⁾

〈第二次疎開〉

美術館第二次疎開品は格納場所の理由により二回に分けて送られた。美

表1 徳川美術館 蓬左文庫疎開及び復帰日時一覧

	出荷		格納		個数 *4
	出荷	日付	格納場所	日付	
徳川美術館(名古屋)					
第一次疎開	徳川美術館	昭和19年3月19日	上伊那図書館収蔵庫	昭和19年3月20日	11個
第二次疎開第一回	徳川美術館	昭和19年7月4日	上伊那図書館婦人閲覧室 (臨時格納)*1	昭和19年7月5日	22個
第二次疎開第二回	徳川美術館	昭和19年8月15日	上伊那図書館新設格納室	昭和19年8月16日	16個
第三次疎開	徳川美術館	昭和20年1月26日	上伊那図書館新設格納室	昭和19年1月27日	11個
			三澤倉庫		11個
第一回復帰	上伊那図書館	昭和20年10月13日	徳川家新倉庫	昭和20年10月15日	23個
第二回復帰	上伊那図書館	昭和20年10月18日	美術館・徳川家新倉庫	昭和20年10月20日	26個
第三回復帰	三澤倉庫*3	昭和20年10月23日	美術館収蔵庫	昭和20年10月25日	22個
蓬左文庫(東京)					
第一次疎開	蓬左文庫	昭和19年3月31日	上伊那図書館収蔵庫	昭和19年4月1日	80箱
第二次疎開	蓬左文庫	昭和19年8月4日	上伊那図書館新聞閲覧室 (臨時格納)*2	昭和19年8月6日	80箱
復帰	三澤倉庫*3	昭和20年10月28日	蓬左文庫	昭和20年10月30日	160箱

- *1 8月16日新設格納室工事完了、第二回什宝到着時に移動、婦人閲覧室は7月3日から8月17日まで閲覧中止。
 *2 8月28日三澤倉庫工事完了につき移動。
 *3 10月20日米軍図書館進駐に先立ち、前日19日返送前の什宝及び貴重書は全点三澤倉庫に移動された。
 *4 蓬左文庫貴重書については箱に詰められているが、徳川美術館美術品については長持、箱など形態が様々なため、個数とした。

美術館及び蓬左文庫の第一次疎開品で上伊那図書館書庫は一杯となった為、図書館の一般閲覧室の一部に壁を設けて新設格納室とし、そこに収蔵する事となったが、資料と作業を行う人手の問題から工事は大幅に遅れた。徳川黎明会の強い希望により上伊那図書館は、新設格納室が出来るまでの間、婦人閲覧室の使用を一時停止し臨時格納することを許可した。婦人閲覧室の開口の大きさの問題から、第二次疎開品は昭和十九年七月四日に婦人閲覧室に格納可能な大きさの二十二個が送られ、新設格納室完成後の八月十五日に容量の大きい十六個が送付された。

第二次疎開第一回の二十二個は七月四日午前八時に美術館より搬出、大曾根駅に運ばれ、貸切の小型貨車二輛に箱を重ねることなく積載された。積載中の午前九時に警戒警報が発令され一同は警戒したが、名古屋に空襲はなかった。九時半に積込終了、雨覆を被せ施錠封印、予定通り午後二時三十九分大曾根駅を発車した。護送者は第一次輸送と同じ日本通運宮本義雄が担当した。当日近藤、野田、小海途、横井の四人が伊那に向かい午後八時五十五分に到着し扇子屋旅館に宿泊した。翌五日午前九時、護送の宮本義雄が図書館に到着、辰野駅で予定より大幅に遅れ、午後一時に伊那町駅に到着する事を伝え直ちに辰野駅に戻った。午後一時貨車は伊那町駅に到着、高木伊那通運会社社長の指揮の下、積卸係二名、伊那町翼壮勤労報国隊十名により積卸作業が開始し、荷車一輛に三人ずつ職員、図書館員が付き添ってリヤカー三輛四往復で図書館に搬入された。二階へのつり上げ作業は一箱に六人がつき注意深く実施された。

また第二次疎開第二回は八月十五日午前七時に美術館より十六個を搬出、前回、前々回と同じく日本通運宮本義雄が護送、近藤、野田、小海途、横井の四人が午後二時四十分名古屋駅発の列車で伊那に向かった。美術品

を積載した貨車二輛は翌十六日午前四時四十分伊那町駅に到着、午前八時より積卸作業を開始し、積卸、運搬、格納には伊那町翼賛壮年団十二名が協力した。この日、七月五日婦人閲覧室に格納した二十二個も新設格納室に移動された。⁽⁵⁹⁾

〈第三次疎開〉

第三次疎開は名古屋の空襲が激化した昭和二十年一月に行われた。⁽⁶⁰⁾ 美術品を格納した二十二個は一月二十六日午前八時手車七輛で美術館から搬出され、大曾根駅で貨車二輛に積載された。これまで三回護送の任に当たった宮本義雄が応召したため、護送は日本通運大曾根支店営業課主任桑原兼義が担当した。午後二時三十九分に貨車は大曾根駅を発車、午後二時四十分名古屋駅の列車で近藤、熊沢、横井が伊那に向かった。貨車は列車編成の都合で辰野駅で分離し、翌二十七日、一輛目が午前七時四十五分、二輛目が午後一時十分に伊那町駅に到着した。午前九時と午後一時半の二回に分けて積卸が行われ、伊那町翼賛壮年団員七名協力の下、運搬格納された。十一個は第二次疎開品と同じ新設格納室に入れられ、残り十一個は借り入れた三澤良信所有の倉庫に納められた。⁽⁶¹⁾ この三次四回で「移動を要し且つ移動可能なもの」の疎開が完了した。⁽⁶²⁾

上伊那図書館で保管される間、野田が刀剣の手入を行い、森川も時に開梱して保存状態を確認、⁽⁶⁴⁾ 美術品と貴重書は返送まで何の問題もなく上伊那図書館及び三澤倉庫で保管された。宿直は十一月になって、毎月一日、十日が熊沢、十一日、二十日が森川、二十一日、末日までが野田と定められた(表2 徳川美術館疎開年表参照)。

昭和二十年二月、上伊那図書館に東京産業大学(現在の一橋大学)からメーガー文庫、ギルケ文庫をはじめとする貴重書の疎開依頼があった。依頼

があった当初、上伊那図書館は徳川黎明会所蔵品以外の受け入れをしないとの判断を行い、断った。しかし図書館創立者武井寛太郎の息子、武井方介が同大学卒業の誼みから同大学蔵書を受け入れるよう紹介し、また自身も足を運んだことから依頼を断ることは出来ず、徳川黎明会と協議の上一部の約束を解除し、東京産業大学の蔵書を受け入れた。⁽⁶⁵⁾ 三月十一日メーガー文庫が、同月三十一日にギルケ文庫が同図書館内に搬入された。

四月に入り上伊那図書館は軍、官庁方面より全館貸与の申し込みがあり、五月五日から講堂、閲覧室は海軍衣糧廠貸与の軍需工場となった。大量のミシンが持ち込まれ、女子勤労隊員である東京からの女学生、伊那高等女学校の生徒百名近くが毎日出入りした。⁽⁶⁶⁾ また伊那町から四キロほどの大萱に飛行機製作所が作られ、近くに作られた飛行場から完成した飛行機が飛び立つこととなった。森川は七月五日付鈴木及び五味宛の手紙で「種々なる施設に就ては、口頭にて報告致すべし。通信は不可能なればなり。兎に角、伊那町は軍部の町となり」と記す。⁽⁶⁷⁾ 上伊那図書館も空襲にあうのではないかとの思惑から、五月から森川は図書館の防空計画を相談、伊那木工会社に工事を依頼した。⁽⁶⁸⁾ また安全上の理由もあり、七月から森川と野田が伊那町勤務を命じられ、交代で館内に宿泊することとなった。⁽⁶⁹⁾ 食料事情も厳しくなり、旅館からは一食一合の米を持参するよう求められたが手配が出来ず、二人は図書館内で自炊することとなった。森川は伊那附近にいくつかの親戚を持ち、その親族に事情を話して二人の食料はそこから提供されていた。⁽⁷⁰⁾

徳川美術館の主要な美術品と蓬左文庫の貴重書は伊那で終戦の日を迎えた。終戦後も森川と野田は伊那に滞在し管理を続けた。九月二十二日、美術品と貴重書は手配が整い次第、名古屋、東京へ復帰することが決められ

た。⁽⁷²⁾九月二十五日より輸送手段をはじめとする復帰交渉が行われ、鉄道省の認可を得て、十月十三日第一回目美術品が名古屋に返送され、また十八日に第二回目が発送された。⁽⁷⁴⁾しかし翌十九日、上伊那図書館は進駐軍により接收されることが決定した。⁽⁷⁵⁾疎開の時は国宝、重要美術品から疎開したが、復帰は逆工程で行われ、図書館内には国宝、重要美術品を含む最重要とされる作品群が残されていた。返送日程に支障をきたすのを回避するため、上伊那図書館で宿直の任に当たっていた野田は図書館司書中村弥紋太と相談、東京の財団本部や美術館との連絡が取れないままに十九日、残っていたすべての美術品及び貴重書を三澤倉庫に移動させた。⁽⁷⁶⁾翌二十日図書館は進駐軍七十名が入り、講堂、会議室、閲覧室、新聞室、ボイラー室等の全部を使用、図書館は閉鎖され、進駐軍の生活が開始した。⁽⁷⁷⁾美術品の疎開品は十月二十三日に、蓬左文庫貴重書は十月二十八日に三澤倉庫より搬出され、予定通り全点が徳川美術館十月二十五日、蓬左文庫十月三十日に無事に復帰した。⁽⁷⁸⁾

四 閣議決定と文部省教学局の関与

徳川黎明会の疎開は美術館から長持を含む七十一個、蓬左文庫から百六十箱の大移動であり、もし当初の計画通り瀬戸市定光寺にリヤカーで輸送した場合には、美術館の被災前に疎開できていなかった可能性がある。では実際に疎開はどのように行われたのであろうか。これまで紹介されてきた東京帝室博物館の美術品疎開や奈良、京都の仏像疎開では昭和十八年十二月に閣議決定された「国宝重要美術品ノ防空施設整備要項」⁽⁷⁹⁾以下整備要項と呼ぶ）及び翌年一月二十四日公布の「国宝及重要美術品ノ防空

施設実施要項」⁽⁸⁰⁾（以下実施要項と呼ぶ）の重要性が説かれてきた。この要項は第二次世界大戦下で国宝、重要美術品に対して出された唯一の法令であり、これにより日本各地の文化財の防衛対策は本格化した。徳川黎明会にとってもこの要項は重要な役割を果たす。

整備要項と実施要項では、国宝、重要美術品のすべてではなく「国史の徴証」となる美術品を安全なる場所に疎開させることを謳った。⁽⁸²⁾疎開に当たっては文部省が実地調査の上計画を立て、文部省の指導の下、関係地方庁が監督して実施、防空施設については八割程度の国庫補助金が出ることでされ、収蔵先は安全と認めた地域に現在ある倉庫を利用し保管に必要な設備を施し、輸送は貴重な作品を扱う技能を有する人間が扱い、地方長官が任じた者により管理されることとなっていた。では実際に文部省はこの要項に基づきどのように対応したのであろうか。

昭和十九年一月十二日付文部省教学局文化課からの文書が徳川黎明会に残されている。⁽⁸³⁾

【資料四】昭和十九年一月十二日付 文部省教学局文化課からの問合文書

昭和十九年一月十二日

文部省教学局文化課

殿

今般本省ニ於テ国宝及び重要美術品ニ対シ防空対策実施可致ニ就テハ貴殿(寺、神社)御所蔵品保管ノ現状ニ関シ、左記五項ニ付宝物ノ品目御明示ノ上昨御手数一月二十日迄ニ至急御回報相成度此段及御依頼尚将来本省又ハ地方庁ニ於テ安全と認メタル、地域ニ適当ナル収蔵庫等ヲ設置シタル際、右ニ收納御希望ノ有無併而御報知相煩度

記

一 空爆ニ対シ略安全ト認メタル^(地)□域ニ移動セルモノ(例令地方ノ別

装等ニ搬出セルモノ)

二 危険地域内ニアルモ防空設備アル倉庫等ニ収納シアルモノ(例令博物館、信託、銀行等ニ保管ヲ依頼セルモノ)

三 自家ニ保管セルモ爆風、火災等ニ対シテハ一応安全ト認メラル、モノ(例令鉄筋コンクリート倉庫ニ収納セルモノ)

四 自家ニ保管セルモ必シモ安全ヲ保シ難キモノ

五 今後移動ハ御予定有之バ其ノ場所竝ニ施設等

文面からしてこの文書は徳川黎明会のみならず国宝を所蔵していた社寺、個人等に送付され、文部省はその保管状況を急遽確認しようとしたと考えられる。この問い合わせに対して、一月二十日徳川黎明会は左記の通り返信した。

【資料五】昭和十九年一月二十日付 文部省教学局文化課宛返信書簡控⁽⁸⁴⁾

拝復 一月十日附国宝及重要美術品ニ対シ防空対策実施ノ為御照会ノ件当方所蔵ノ国宝及重要美術品ハ防空設備アル倉庫ニ収納致居候

右御回報申上候

草々

昭和十九年一月二十日

尾張徳川黎明会

文部省教学局

文化課御中

一月二十日時点でまだ美術品疎開は行われていないことから、「防空設備ある倉庫」とは徳川美術館の収蔵庫と東京蓬左文庫を示すと考えられる。文部省が示した選択肢でいえば「二」に該当したと考えられるが、一から五の選択肢のいずれに該当するか返答していない。

美術館所蔵品の第一次疎開終了後になって、徳川黎明会は文部省教学局に疎開を報告した。

【資料六】昭和十九年三月二十三日付 文部省教学局宛書簡⁽⁸⁵⁾

本年一月十二日附本会所蔵国宝及重要美術品に對し防空対策実施方に付御下向に接し候に付当時鉄筋コンクリート倉庫に所蔵しある旨御答へ申上置候処、其後の情勢日々緊迫市内にある現在の倉庫にては到底安全を期し難きことを痛感致候に付、今回長野県上伊那図書館へ疎開することと決定し既に本会名古屋古屋市徳川美術館什室は本月二十日第一回分とし現地に輸送済に候、就ては本会蓬左文庫所蔵図書、続日本紀、世継物語、増鏡、水鏡、侍中群要、源氏物語、齊民要術、太平聖恵方八千七百余冊を第一回分として至急輸送致し本品は何れも国家として永久保存を要する珍宝に付、右数量が貨車一両分に満たざる場合ありとするも途中危険防止の爲め是非とも貨車一両を以て輸送致し度希望に有之候間、御多忙中恐縮の次第に候へ共、本図書を此際至急疎開せしむるを必要とする適當の文書、御下附拝承仕り度奉願候也

昭和十九年三月廿三日

財団法人尾張徳川黎明会 会長 侯爵 徳川義親

文部省教学局長近藤壽治殿

美術館第一次疎開を報告すると共に、その際貨車の貸切に苦労したことから、疎開のための何らかの証明をする文書を求める手紙である。文部省教学局との往復文書はこの三通しか確認されない。徳川黎明会にはそれ以上の文書が残らないことから、文部省教学局はそれ以上徳川黎明会の疎開に関与しなかったと推定される。

文部省教学局は一月十二日の問合文書の返信を承けてどのように美術品を守ったのであろうか。三島貴雄によれば東京帝室博物館の第五次疎開に文部省教学局から依頼された華族所蔵の美術品が含まれていたという。⁽⁸⁶⁾し

かし徳川黎明会においても自ら対策を講じるしかなかったように、第二次世界大戦では数多く美術品を保有している個人や私立美術館の美術品の保護は所蔵者に任されたようである。疎開せずに延焼した作品、安全と信じた疎開先で空襲にあった作品、防空設備のある建物もろとも焼失した作品、その失われた作品数は『戦災等による焼失文化財』記載より遙か多数に及ぶと思われる。⁽⁸⁷⁾

しかし、もし整備要項、実施要項がなければ徳川黎明会も疎開実施は不可能であつたと考えられる。昭和十九年二月十一日付鈴木専務理事より近藤主任宛の手紙には左記の通りある。

【資料七】昭和十九年二月十一日付鈴木専務理事より近藤主任宛書簡⁽⁸⁸⁾

重要美術品を伊那町に輸送方に付、日本通運会社秘書菅野武治氏に依頼したる処、現時の情態に付、一車買切りは鉄道省に於て容易に応諾せず、且又一車に満載するだけの数量なければ尚更困難なり、若し許可なければ普通の個々に輸送することとなり、積替の際に貴重品破損する恐れあるに付、積込荷物少数と雖も是非とも一車買切りを要するに付、夫れには官庁又は帝室美術館等より戦時下空襲必至の場合に付、国宝、重要美術品級のものとは速に適當の個所に疎開保護の必要ある文書を添えて鉄道当局に交渉するの要あるとのことに候、美術館什宝に付ては別紙帝室博物館渡部総長の書面申受けたるに付菅野秘書より貴地通運支店山梨公用課長宛紹介の名刺と共に送付致候に付至急同氏に面会、万事打合せ御依頼相成度候(後略)

鉄道の車輛貸切は簡単ではなかったが貸切でなければ美術品は移動できなかった。鉄道当局に交渉するにあたり、鈴木専務理事は帝室博物館総長渡部信に書面を依頼し、「公用」としての美術品疎開を証明するよう依頼

した。渡部信は当時徳川黎明会評議員を務めており、また徳川義親の長男義知(一九一―一九三)は昭和十年八月から東京帝室博物館に勤務していた。⁽⁸⁹⁾東京帝室博物館は昭和十六年に疎開検討を開始したが、同時期に徳川黎明会が疎開検討を開始するのも、この関係があり情報もたらされたことと推定される。また疎開格納設備に関しても帝室博物館の意見を聞いていた。⁽⁹⁰⁾

この時添付された渡部信の封書は昭和十九年二月三日付、尾張黎明会会長徳川義親宛である。⁽⁹¹⁾

【資料八】昭和十九年三月二日付渡部信より徳川義親宛書簡

肅啓 嚴寒の候、益々御清穆之段奉賀候、其後引続き南方の御重職に御執掌被遊各方面に於て縦横に御活躍の御事と拝察仕り、誠に御苦勞千万に奉存候、何卒此上とも充分御加餐の上為邦家御尽瘁被下様呉々も御願申上候

陳者在名古屋貴黎明会美術館の名宝御保護に関しては菲才等の申上る迄もなく既に満全の御対策を講せられ候御事とは存候得共、大東亜戦争も漸次決戦段階に突入し本年は空襲必至の情勢も為之、政府に於ても最近特に国宝重美等の保護疎開に力を用ゐ居候折柄、貴美術館に於て万々一適當の御計画中に未実行に属せらるゝが如き事も被為有候はゞ(勿論無之)と、確信仕候へ共、此際至急御実現被遊ては如何に候哉、賢明なる貴黎明会幹部の方々も居らせらるゝにか、はらず、をこがま敷事を申出恐縮至極に存候へ共、閣下には重要な国務を以て御留守勝かと上存、小生も乍不肖貴會評議員の席末を汚し居る関係も有之憂慮の餘り老婆心を以て申上候次第、御無礼の段は何卒幾重にも御寛容被下度希上候

二月三日

尾張黎明会々長

侯爵徳川義親閣下

拝呈
渡部信

侍史

渡部信の書簡により鈴木専務理事の思惑通り手順は進んだ。鉄道省はすぐに認可を出し、第一次疎開は昭和十九年三月という時期に実施できた。国宝、重要美術品の疎開が国の施策であり文部省の指示であり、「政府に於ても最近特に国宝重要等の保護疎開に力を用ゐ居」ることが示されなければ、輸送手段は確保できなかった。⁽⁹²⁾

川口朋子は、昭和十八年の「国宝及重要美術品ノ防空施設実施要項」が決定されるまで「避難」は敗戦思想に基づく不適切用語として扱われていたことを指摘する。⁽⁹⁷⁾昭和十六年に疎開準備を開始し梱包が終了しながら昭和十八年まで美術品が館内に留め置かれたのもこの思想統制があつてのことと想像される。昭和十六年に博物館界で情報交換され議題となつていた美術品疎開は、東京帝室博物館の疎開を除いて昭和十七年には表面上はほめることが出来なくなる。⁽⁹⁸⁾文化財の疎開に触れることは勿論、美術品を移動することのできない社会状況があつたと考えられる。二つの要項があつてはじめて美術品疎開は可能となつた。第二次世界大戦下の政府による国宝、重要美術品疎開指示は、文部省教学局下の疎開ではない本例のような疎開の実施にも不可欠であつたと考える。

疎開には転出証明書が必要であつた。美術館の第三次疎開の際の証明書が現存する(挿図7)。

徳川美術館の美術品疎開

都市疎開地方転出証明書									
現住所	転出先	転出年月日	転出理由	転出場所	転出方法	転出費用	転出結果	転出後	転出前
名古屋市中区徳川町二丁目二七番地	長野県上伊那郡伊那町上伊那図書館	昭和二十年一月二十六日	国宝及重要美術品ノ防空施設実施要項ニ因ル地方転出	長野県上伊那郡伊那町上伊那図書館	長持杵師及木口相二拾二個				

右ハ防空疎開ニ因ル地方転出者タルコトヲ證明ス
昭和二十年一月二十四日
名古屋市中区徳川町二丁目二七番地
徳川美術館長 小川 龍雄

挿図7 昭和20年1月24日付都市疎開地方転出証明書

【資料九】昭和二十年一月二十四日付 都市疎開地方転出証明書⁽⁹³⁾

現住所 名古屋市中区徳川町二丁目二七番地
転出先 長野県上伊那郡伊那町上伊那図書館
転出種別 国宝及重要美術品疎開に因る地方転出

転出予定月日 昭和二十年一月二十六日

転出者 国宝及重要美術品 長持粹締及木箱二拾二個

転入学転就職輸送等に対する便宜供与の要否

輸送の便宜を供与するの要あり、荷造資材の便宜供与するの要あり

右は防空疎開に因る地方転出者たることを証明す

昭和二十年一月二十四日

名古屋市東区長外山地世

この証明書は人の疎開証明に使用する用紙を転用して作成されている為、項目は「転出者」となっている。ここに「輸送の便宜」と「荷造資材の便宜供与」とある通り、この証明書をもって輸送は便宜が図られ、荷造資材もこの証明書がなければ入手不能であった。

徳川黎明会は昭和十六年十月に第一次疎開の梱包を終了している⁽⁹⁴⁾。また第二次疎開の梱包資材については日本通運株式会社から資材の提供を受け、後に支給された資材を日本通運に納めることにより、疎開を早めることが出来た⁽⁹⁵⁾。しかし第三次疎開が大幅に遅れたのは証明書があっても、資材が揃わなかった原因による。尾張徳川家とはいえ完成した箱の入手はできず、様々に手を尽くして木材の提供を受けたものの、箱を作るところから作業を開始しなければならなかった⁽⁹⁶⁾。梱包資材もまた疎開が国策でなければ入手不可能であった。

日本における第二次世界大戦下の美術品・資料疎開は各館を主導する人物の裁量が大きく影響したと思われる。森川の筆記と推定される東京帝室図書館館長松本喜一の談話メモは、徳川美術館及び蓬左文庫の疎開場所の候補を松本が紹介したことを示すのみならず、松本と文部省の危機感の差異を表していると考えられるため、ここに引用したい⁽⁹⁹⁾。

【資料十】「松本帝国図書館長の談話」日時不明

大東亜戦争になる前に僕は空襲のある際の貴重図書の外に就いて考へた。第一案として埼玉県の空襲される憂のない場所へ仮書庫を建て、其所へ移管するのが一番良案だと思つた。地下室へ置くのは図書の保存上永くは置かれぬ。丁度其折、企画院から「空襲時の貴重図書保管上必要な設備を要するなら計画案を提出して欲しい」との通知があつたので、早速書面にして文部省の手を経て、右の案を呈出して置いた。其後何時になつても、何等の沙汰がないから文部省に聞いて見た所、「あれは其儘になつて居る、企画院には送つてない」との返事。「それは困る、貴重図書の保管上、空襲時の設備をして置かなければ、館長としての責任上甚だ困る」と云つた所、「宜しいではないか。図書の利用上、遠い場所に移管すると云ふのは図書館の性質上良案とも思へぬから、空襲で失つたら、それは不可抗力である、再び購入したら宜しかろう」と云ふ返事だ。「再び買へる本なら遠方に置きはしない。日本文化史の志料⁽⁷⁴⁾として他に求める事の出来ない、貴重なものを絶対安全地帯へ移管する必要があるのだ」と云つて文部省の役人を責めた。企画院へ問合せた所「既に解答のあつた所のみ処置をしたので、今からでは間に合はぬ。資料等手に入れる事は出来ぬから駄目である」との返事であつた。

その中、大東亜戦争になつた。隣りの博物館に交渉して地下室の一部を借用して、いざ空襲と云ふ際だけ、其所へ移したらと考へたから、松坂屋へ交渉して「行李」「箱」を沢山に買入れ、荷造りをして置いた。防空演習の際、夫れを移管する練習をした所、思つたより迅速に移転了した。然し考へて見ると、空襲時は昼間時のみあるので

はない、真の闇夜にもあるのだ。僕の経験に依ると、嘗て僕の家の隣家が焼けたとき、荷物を出した所、真闇で手伝ひの人の顔は見えず、鎮火後調べた所、荷物が紛失して居る。だから空襲がある際の移転先は考へものである。

新しく書庫を建て得られぬとすれば既設の図書館の中で安全地帯にあるものを撰み、置いて貰ふより方法がない。そこで考へた。埼玉県は現在では安全地帯とは云へぬ。東海道沿線も危険である。東北方面には預かれるやうな図書館はない。気流の関係上、長野県、山梨県が近県では一番に絶体安全と云へて宜しい。

第一候補として県立長野図書館。第二候補として伊那町立図書館。

第三候補として甲府の山梨県立図書館。長野のは、鉄筋コンクリートの大図書館で、知事は僕の友人であり、館長は僕が世話した男であるから、頼むのに都合が可い、そこで文部大臣に話をして大臣から公式に知事に依頼して許可を得たので、先日林司書官初め三人の人をして第一種貴重図書として三万冊を三輛の列車を以て送り、今日係員は整理を済ませて帰って来る筈である。但し図書は送り離しにして置くわけには行かぬ。一昧なら常時館員を置いて保管もさせ、図書保存上の始末に注意をさせて置かなければならぬ。然し今は予算もないから、隨時必要時に館員を出張させて其の始末をさせる積である、それで先方の管理者には適当な手当を支給する事にはしてあるが、単に書庫の番人と云ふだけで、図書の始末をさせる訳には行かぬ。

帝国図書館では止むを得ず、右のやうな処置を取ったのだが、どうも他には方法があるまい。空襲のなかった際は、余計な金を使って馬鹿な奴だと笑ふ者があるかも知れぬが、責任者としては、空襲される

可能性があると云ふ際だから止むを得ぬだろう。

以上松本館長の話。

第二候補地の伊那は空襲時には一番安全なる所かも知れぬが、町立になったと聞いたが、以前は財団法人のもので、僕は行った事がないから知らぬがいづれ大きくはあるまい。第三候補地の甲府は、知って居るが県庁の隣りにあつて、小さな図書館である。但し県立としてはと云ふので町立なぞよりは大きい。

以上松本館長の余談。

この記録に基づけば、東京帝国図書館の疎開は館長である松本喜一の判断で行われたものであり、国や省庁主導で行われた疎開ではない。この松本の推薦により徳川黎明会は上伊那図書館という疎開場所を見出した。松本が示唆したのは疎開先のみではない、通常の管理は預託先の図書館に依頼するが「始末」のために館員を出張させるという方法や、本来収蔵用のスペースではない場所に障壁を設け収蔵する方法など、東京帝国図書館は先立つ具体例を示した。

戦争下の美術品疎開は容易ではない。整備要項と実施要項の二つがなければ「公用」でない美術品疎開は不可能であつたであろう。しかし国の閣議決定を待つのではなく、日本参戦前から疎開先を検討し美術品の梱包を開始した文化財を守るという強い意志、有識者にその具体的施策を尋ねる人脈、事態が切迫する前段階での逸早い判断力、実行力、それらのすべてが揃わなければ、第二次世界大戦下で多くの文化財を疎開させることは困難であり、文化財を守ることは出来なかつたのではなからうか。

おわりに

本稿では徳川美術館所蔵品疎開経過とその背景の一部を紹介した。徳川美術館主任近藤真太郎は往復書簡の中で度々「天佑」と記している。これらの美術品が無事に疎開し守られたことはその言葉通り、奇跡的であるのかもしれない。

近藤は空襲後の五月二十日に上伊那図書館から帰名し、事後処理に当たったが、二十八日眩暈に襲われ歩くことが出来なくなった。「身神疲労」と診断され家族の疎開先で療養生活に入ったが、治療の甲斐なく六月二十五日に逝去した。野田芳太郎の家族は大曾根邸内役宅焼失後、疎開先の一宮で再び被災し上伊那図書館にいた野田を頼って図書館を訪れた。家も疎開先も失った家族は伊那に家を借りて終戦を迎えた。美術館に美術品が戻って一ヶ月後、野田は退職届を提出している。力仕事で疎開に尽力した美術館のボイラー士小海途護一も十月末日、徳川美術館を去った。彼らを守ろうとした文化財の内、移動可能な美術品は守られたが、彼らが家職として暮らしていた大曾根邸は失われた。尾張徳川家に伝来した文化財を決して失ってはならない、その強い信念と勇氣ある行動をもって彼らは尽力したが、失意の念は強かったと思われる⁽¹⁾。

徳川美術館の美術品疎開に協力したのは職員のみではない、本稿で触れた以外にも多数の協力者がいる。最後に陶芸家加藤春二(一八九二～一九七九)の協力を紹介したい。

昭和十九年一月十四日、十五日の両日、加藤は徳川美術館を訪れた。加藤は自身の製作する陶磁を包むために保有していたのであろう段ボール

紙、薄様、包装紙といった材料を大量に持ち込み、徳川美術館の第一次疎開予定の陶器、二十七点の茶入、香炉、茶碗、水指等を移動に耐えるよう一点一点懇切丁寧に梱包した。第一次疎開の美術品、そこには茶入「靱」や千鳥香炉等が含まれていた。持ち込んだ梱包材は長持内部の下に敷く分までもあり、資材を殆ど入手する事のできない状況において、大きな助けとなった。⁽²⁾

日本で最も文化財が失われたのは応仁の乱と第二次世界大戦と言われる。戦乱が起きた時誰かに守られてはじめて美術品は伝来する。守られなければそれは保持できず、そして守ろうとしても守れない場合もある。現在伝来する美術品は永続的に安全に保管されてきた訳ではない。美術品を守ることに、それがどれだけの苦勞を伴うのか、その記録として本疎開記録は重要な意味を持つと考える。

註

(1) 須田肇「戦時中の史料保存―徳川林政史研究所所蔵史料の疎開」(『徳川林政史研究所研究紀要』第三十四号 平成十二年三月、『金鯢叢書』第二十七輯 徳川黎明会 平成十二年三月)。

(2) 本論は主に以下の文献に依拠する。

財団法人上伊那図書館編『財団法人上伊那図書館三十年史』財団法人上伊那図書館 昭和三十五年十二月、「伊那町日誌綴」(昭和十九年三月二十日より昭和二十年十月十五日、財団総務部管理 財団史A118)、「什宝疎開関係書類」(財団総務部管理 新財団史10023)、「美術館什宝非常搬出書類」(財団総務部管理 財団史J61)、「昭和二十年御用留 徳川家」(徳川美術館蔵、以下「御用留」と略称)、「昭和二十年 往復文書綴 徳川美術館」(徳川美術館蔵、以下「往復文書綴」と略称)。

(3) アメリカ合衆国戦略爆撃調査団編 名古屋市鶴舞図書館訳『名古屋市爆撃の

効果』一九四七年六月訳 名古屋市総務局企画部調査課 一九六四年)。

- (4) 五味末吉調「御住居之沿革」昭和二十二年 個人蔵。
- (5) 五味末吉調「御住居之沿革」昭和二十二年 個人蔵。
- (6) 昭和五年十月十日の大曾根邸・小牧山の寄贈式については拙稿「尾張徳川美術館」設計懸賞(『金鯢叢書』第四十三輯 徳川黎明会 平成二十八年三月)参照。
- (7) 『名古屋の公園』名古屋市役所 昭和十八年五月。
- (8) 昭和十九年十二月三日付近藤真太郎より鈴木家令宛書簡に「美術館の迷彩壁塗工事は大略終了」と記される(『雑覧』財団総務部管理 財団史196)。他に昭和十七年五月二日付「見積書 御館エリヤ防空設備工事費 竹中工務店名古屋支店」(財団総務部管理 財団史156)、昭和二十年一月十七日付近藤真太郎より鈴木家令宛書簡(御用留)註(2)参照、昭和二十年八月二十九日付「美術館迷彩工事精算見積書送付の件」、昭和二十年九月十一日付「美術館迷彩工事に関する件」、昭和二十年九月二十五日付「美術館屋根迷彩取り払工事完成の件」(以上三件「往復文書綴」註(2)参照)、昭和二十年一月十七日付書簡(御用留)註(2)参照等に美術館偽装工作に関する記録がある。

- (9) 註(3) 文献「爆撃状況―名古屋」(二五―六頁)及び「前掲地図に示した爆撃個所に対する爆撃状況―名古屋市」(二七―八頁)によれば、目標爆撃と地域爆撃と使い分けされていたことが判明する。徳川美術館の所在する徳川町周辺は地域爆撃地域として周囲が塗りつぶされているにも関わらず、徳川園一帯を白く塗り残しており、もしかすれば空襲を避けるべき場所と指定されていたのかもしれない。
- (10) 昭和二十年一月十七日付近藤真太郎より鈴木家令宛書簡(御用留)註(2)参照。
- (11) 昭和十九年十二月十一日付鈴木信吉より近藤真太郎宛書簡に「大理石婦人像其他散乱せるものは適宜御片付御願申候」とあることから、十二月七日の昭和東南海地震で美術館に置かれていた大理石婦人像が倒れ砕けたと思われる(『雑覧』財団総務部管理 財団史196)。他に昭和十九年十二月十日付近藤真太郎より鈴木信吉宛書簡(『雑覧』財団総務部管理 財団史196)、昭和十九年十二月十九日

徳川美術館の美術品疎開

付鈴木信吉より近藤真太郎宛「最後の伊那送り荷物其後の状況に関する件」(『往復文書綴』註(2)参照)、昭和二十年一月十五日付「地震御見舞の件」(『御用留』註(2)参照)に地震に関する言及がある。

- (12) 昭和二十年一月二十三日付「敵機編隊来襲の件」(『御用留』註(2)参照)。
- (13) 昭和二十年三月二十五日付「敵機来襲に関する件」(『御用留』註(2)参照)。
- (14) 昭和二十年四月七日付「敵機来襲に関する件」(『御用留』註(2)参照)。役宅破壊に伴い、近藤真太郎と野田芳太郎の罹災証明書と役宅転出願が綴じられる(『往復文書綴』註(2)参照)。
- (15) 昭和二十年五月十四日付名古屋別邸熊沢及び野田より本邸庶務課長宛「名古屋別邸敵襲の為め焼失の件」(『御用留』註(2)参照)、同日付「名古屋別邸敵機来襲焼失伊那町近藤主任へ報告の件」(『往復文書綴』註(2)参照)、同月十五日付名古屋別邸兼美術館主任より本邸庶務課及び総務部御中「名古屋別邸始め敵襲に依り焼失の件」(『御用留』註(2)参照)、同月十七日付伊那町近藤真太郎より美術館御中書簡(『往復文書綴』註(2)参照)。五月十四日の空襲以降その後の爆撃による延焼を防ぐために、焼け残った待合と美術館入口の下足場を取り払うか否かの議論が行われているが、その中でも心空庵本体は全焼したが待合もまた貴重なので残したいと記されている(昭和二十年五月三十一日付鈴木信吉より近藤真太郎宛書簡「往復文書綴」註(2)参照)。
- (16) 同月十五日付名古屋別邸兼美術館主任より本邸庶務課及び総務部御中「名古屋別邸始め敵襲に依り焼失の件」(『御用留』註(2)参照)。
- (17) 昭和二十年五月三十一日付横井壽定雄より鈴木信吉宛書簡(『御用留』註(2)参照)。
- (18) 昭和二十年六月十二日付鈴木信吉指示による。昭和二十年六月十二日付専務理事兼家令鈴木信吉より美術館及び別邸御中(『往復文書綴』註(2)参照)。
- (19) 昭和二十年八月二日付美術館兼名古屋別邸主任より総務部及び本邸庶務課御中「名古屋市空襲状況報告の件」(『往復文書綴』註(2)参照)。
- (20) 『名古屋空襲誌』第一号 名古屋空襲を記録する会 一九七七年二月。
- (21) 五月十四日の被災後、七月に入り応急処置が行われた(昭和二十年六月二十九日付 美術館代より総務部御中「美術館天井囲シャッター修理に関する

件」昭和二十年七月六日付 名古屋別邸兼美術館主任代より本邸庶務課御中総務部御中「空襲破損箇所応急手当に関する件」以上二件「往復文書綴」註(2)参照。それによれば爆風ではずれ火の粉が吹き入った美術館天井廻りのシャッター鉄板を元の位置にはめ込み、破損した本館裏中央入口鉄扉及窓硝子、事務所北側応接室、宿直室、地下室小使宿直室、全炊事場の窓硝子に板を嵌め込んだ。

徳川美術館は昭和二十二年十一月に再開館し、昭和二十七年四月一日博物館法公布により愛知県第一号として博物館登録されたが、昭和三十一年にあつても内部は悲惨な状況であつたことを徳川義宣が記している(徳川義宣「化物屋敷とテラダ松」『葵』八号 平成三年一月初出、『徳川さん宅の常識』淡交社 平成十八年三月再掲)。

(22) 昭和十六年八月三十一日付近藤真太郎より鈴木家令宛書簡によれば、二十九日美術館地下室隔壁の設計を依頼、鉄扉は建中寺廊下の防火壁に使用予定のものを流用する予定としている(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(23) 上伊那図書館については、『財団法人上伊那図書館三十年史』(註(2)参照)、上伊那教育編集委員会編『上伊那図書館創立五十周年記念誌』(上伊那図書館長星野政清 昭和五十五年九月)、上伊那教育編集委員会編『上伊那図書館閉館記念誌』(上伊那図書館長久保村清一 平成十五年十月)がある。財団法人上伊那図書館については伊那創造館学芸員濱慎一氏に資料、文献等細部にわたり御教示いただき、また伊那創造館内部をご案内いただき、資料閲覧、提供にお力添えいただいた。

(24) 『財団法人上伊那図書館三十年史』(註(2)参照 二九六～七頁)。尚、昭和十五年に閲覧者は一一、八六九人だが昭和十九年には六、八九七人、二十年には二、七二四人まで減少している。

(25) 「上伊那図書館設立趣意書」第二章は目的として「本図書館は文化の普及発達を計るがため、図書館の設置、公会堂の設置、博物館の設置、講演会の開催其他教育に関する事業の研究及施設をなす」としており、建物構成と同様、様々な目的を持つ施設である(「財団法人上伊那図書館三十年史」註(2)参照)。

(26) 借用検討当初は消毒室に最重要品を入れ、消毒室と書庫の一部を借用する予定としていた(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(27) 三澤家住宅母屋は昭和四十六年神奈川県川崎市に日本民家園内に移築されている(神奈川県指定重要文化財)。三澤家については『旧三澤家住宅』(日本民家園収蔵品目録四)(川崎市立日本民家園 二〇〇五年七月)、野呂瀬正男『日本民家園草創期の記憶―旧三澤家住宅・旧工藤家住宅』(川崎市立日本民家園 二〇〇六年三月)を参照した。

(28) 池上勲について『上伊那図書館三十年史』では昭和八年二月七日～二十九年三月三十一日書記、同年四月一日より司書と記録する(「財団法人上伊那図書館三十年史」註(2)参照)。

(29) 『伊那町日誌綴』昭和十九年五月十六日条(「伊那町日誌綴」註(2)参照)。

(30) 第二次世界大戦下の美術品疎開について左記の文献を参照した。美術品疎開は昭和十六年一月二十四日東京帝室博物館における「戦時防空対策として美術品を分散疎開する案」の協議に開始し、二月十日に大臣宛提出された「有事の際の美術品等の処置に付いて伺」が初頭とされている。

大窪太朗「疎開から展覧会へ」(「書陵部紀要」第一号 宮内庁書陵部 昭和二十六年三月)。

東京国立博物館編『博物館の思ひ出』東京国立博物館 昭和四十七年十一月。

東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』東京国立博物館 昭和四十八年三月。

辻本直男「日本の宝物疎開―東京帝室博物館の苦心」(『歴史と人物』百三十七号 中央公論社 一九八二年十二月)。

鈴木良「太平洋戦争と文化財」(『歴史地理教育』三六六号 歴史地理教育者協議会 一九八四年四月)。

武末勤「太平洋戦争と奈良の「国宝」疎開」(『歴史地理教育』四五一号 歴史教育者協議会 一九八九年十二月)。

『奈良国立博物館百年の歩み』奈良国立博物館 平成七年四月。

武末勤「太平洋戦争と帝室御物の疎開」(『歴史評論』五七三号 校倉書房 一九九八年一月)。

森泉海「戦時下における東京帝室博物館資料の保存と展示」(『國學院大學博物館學紀要』第三十三輯 國學院大學博物館学研究室 平成二十一年三月)。

椎名仙卓『近代日本と博物館―戦争と文化財保護』 雄山閣 二〇一〇年十二月。
三島貴雄「東京帝室博物館における文化財疎開の概要と新出資料について―」『翁島疎開日誌』(仮称)の紹介を中心に)、『MUSEUM』六一六号 東京国立博物館 平成二十年十月。

(31) 現在確認される最初の記録は昭和十六年二月八日付美術館主任近藤真太郎から尾張徳川家家令鈴木信吉宛「定光寺経蔵・宝庫等調査の件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)である。

(32) 太田正弘編『定光寺誌』 応夢山定光寺 一九八五年三月。
瀬戸市歴史民俗資料館『特別企画展図録 定光寺宝物展 定光寺からみる瀬戸の歴史』 瀬戸市歴史民俗資料館 二〇〇〇年十月。

(33) 『定光寺誌』五五頁(註(32)参照)、中島孝「定光寺略史」『特別企画展図録 定光寺宝物展―定光寺からみる瀬戸の歴史』 四〇八頁(註(32)参照)。

(34) 昭和十六年三月二十二日付美術館主任近藤真太郎より総務部宛「定光寺に関する件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(35) 昭和十六年四月二十六日付総務部長五味末吉より美術品主任近藤真太郎宛書簡及び昭和十六年五月十三日付美術館主任近藤真太郎より総務部御中「定光寺工事着工の件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(36) 昭和十六年五月二十五日付美術館主任近藤真太郎より総務部御中「美術館什宝目録送付の件」、昭和十六年六月三日付総務部より徳川美術館御中「美術館什宝搬出計画に関する件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(37) 昭和十六年十月十四日付美術品主任近藤真太郎より総務部御中(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

什宝美術館、残留品(非常搬出準備荷造り)は、刀剣、写真等特別に容器作製が必要あるものを除き、大体終了致候に付御報告申上候

(38) 昭和十八年十月五日付美術館主任より総務部御中「貴重什宝保護措置に関する件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(39) 昭和十八年九月十八日付総務部より徳川美術館主任宛指示書(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(40) 昭和十八年十月五日付美術館主任より総務部御中「貴重什宝保護措置に関する

る件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)添付。

(41) 昭和十六年九月四日付美術館主任近藤真太郎より総務部御中「什宝移転運搬車に関する件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)には左記の通りある。

什宝移転運搬車ノ件ニ関シ九月二日附御照会相成候処、目下ニ於テモ「トラック」ハ中々手ニ入ラズ、馬車ト雖モ相当困難ニ有之、此頃定光寺ヘ物品ヲ送ル際シテモ各方面ニ亘リ依頼セルモ間ニ合ハズ、結局竹中工務店ヲ煩ハシタル次第ニ候、該店ナラバ馬車ノ二輛位ハ融通ヲウタクト出来得ルアラシモ、其他ニテハ先ツ入手困難ト存候、故ニ運搬機關トシテハ此馬車ト「リヤカー」ニヨリ外ナカランカト存候、如カモ一日ニ一回ヨリ運ビ得ザルベク輸送力ハ余リ多カラサルモノト存候

(42) 昭和十八年九月三日付総務部より美術館主任宛指示により、九月七日から十三日まで定光寺の一週間の湿度が記録された。十四日、美術館主任近藤真太郎は納骨堂は普段より湿度が高いと予想していたが、収蔵場所は若干乾燥しているものと思っていたが、湿度百パーセントには驚いた、と総務部に報告している。

その後十月十一日までの湿度記録が記録用紙を添えて残されている(昭和十八年九月二十一日、二十八日、十月二日、十二日付美術館主任より総務部御中報告「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(43) 昭和十八年十一月二十四日付 蓬左文庫主任森川鉉二起案総務部宛「貴重圖書保管に関する件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

敵機ノ我本土空襲ハ今ヤ時日ノ問題トナリタリ。此際当文庫ニ於テハ所蔵セル貴重圖書ノ内最モ貴重トシテ取扱ハル、モノヲ空襲ニ対シテ安全ナル地帯ニ移シ保管スルヲ最善ノ策トナス

幸ヒニモ長野県上伊那郡伊那町ニアル上伊那図書館ハ財団法人ノ組織ニシテ建物ハ鉄筋コンクリート建築ナリ、場所モ火災ノ憂ヒナキ所ニアリテ保管箇所トシテ最適ノ条件ヲ具ヘタリ、且ツ交渉ノ結果、保管承諾ノ返事ヲ得タリ

(44) 昭和十八年十一月二十四日付鈴木信吉より近藤真太郎宛書簡「雑覧」(財団総務部管理 財団史195)。

(45) 『財団法人上伊那図書館三十年史』 一〇九―一〇頁(註(2)参照)。尚、引用

文に続いて以下の通り記される。

本年三月、蓬左文庫（東京目白の徳川義親侯家内）の図書、徳川美術館名古屋）の美術品到着格納す。然して尚重要な美術品多数ありて、疎開希望に付、近年一般閲覧者の減少により、一般閲覧室に余裕を生ぜし故、円柱を境として板壁にて遮断して、北側を貸与することとせり。（同遮断部は将来女子閲覧室として使用する予定）、疎開に要する費用は全部先方持ち。工作物は疎開終了後は本館に寄附するを条件とし、貸与料年額五百円とせり。但し三ヶ年間、三ヶ年後は改新のこと。

昭和二十年一月十六日の理事会においても協議事項の三で徳川黎明会の疎開につき仁科理事長から報告があったことが記されている（一一頁）。理事会に向けて中村司書と森川が上伊那図書館に徳川黎明会から図書を寄贈することに関して相談しているため、その内容と考えられるが、詳細は不明である。

(46) 昭和十八年十一月二十四日付鈴木信吉より近藤真太郎宛書簡〔「雑覚」財団総務部管理 財団史195〕。

(47) 昭和十九年三月十七日付「美発一八号 什宝受領格納の爲め伊那町へ出張」
「美術館什宝非常搬出書類」(財団総務部管理 財団史196)。発着時程は大曾根駅二十日午後二時三十九分発、多治見午後四時二十八分着、同五時三十分発、中津八時七分着、同八時四十七分発、福島十時四十四分着、同十一時十四分発、塩尻二十一日午前〇時四十分着、同午前一時五十二分発、辰野二時三十分着、同三時五十七分発、伊那着午前四時四十分である。

(48) 「伊那町日誌綴」昭和十九年三月二十日、二十一日(註(2)参照)、昭和十九年三月二十日付電報、昭和十九年三月二十日付美術館主任より総務部御中「美発二十号 什宝輸送に関する件」(以上二件「美術館什宝非常搬出書類」註(2)参照)、昭和十九年三月二十一日付森川鉉二より鈴木信吉宛書簡(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。移動品は第一号(長持)―歌書一点、巻物九点、掛物九点、第二号(長持)―掛物十五点、第三号(長持)―掛物六點、真珠团扇一点、手箱一点、文房具一点、盆石一点、花活一点、第四号(長持)―香炉二点、茶入八点、茶杓一点、天目台三点、盆三点、第五号(長持)―茶碗十三点、塵壺一点、第六号―花活の一部、水指三点、第七号(木箱)―後二条天皇詞書絵巻、第八号(木箱)―源氏物

語絵巻、第九号―源氏物語絵巻、第十号―源氏物語絵巻、第十一号―刀剣二十三点、装剣具三点、所翁牧溪龍虎とある(昭和十八年十月五日付美術館主任より総務部宛「貴重什宝保護措置に関する件」美発第一〇四号(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。最終的な移動品名簿は昭和十九年四月十八日美術館主任より総務部宛提出された(「第一回疎開什宝品名簿提出の件」「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(49) 「伊那町日誌綴」註(2)参照。

(50) 「伊那町日誌綴」三月二十一日(註(2)参照)。中村弥紋太は上伊那図書館で昭和五年八月十九日司書任命、昭和二十年三月三日付退任とある(「財団法人上伊那図書館三十年史」二九八頁 註(2)参照)。

(51) 「伊那町日誌綴」註(2)参照。昭和二十年三月八日付で職員全員に疎開先住所、連絡先、担当者の名前など告知されると同時に出張員当番日制が記される。

(52) 「伊那町日誌綴」、『財団法人上伊那図書館三十年史』註(2)参照。

(53) 閲覧室の一部借用は昭和十九年四月五日には合意した(「財団法人上伊那図書館三十年史」註(2)参照)。

(54) 仕切製作は伊那木工有限会社(長野県上伊那郡伊那町室町 専務取締役 中村重喜)に依頼された。四月十八日には大工と仕切工事の交渉を開始、五月一日に閲覧室仕切を発注した。軍の注文品を優先せざるを得ない状況の中で、伊那木工会社が徳川家の疎開に協力する姿勢に森川は何度も言及している。他に伊那木工会社には蓬左文庫第二次疎開用の図書箱八十箱、美術館第三次疎開用箱、三澤倉庫抜軒等が依頼された(「伊那町日誌綴」五月十七日 註(2)参照)、昭和十九年六月二十三日付森川より五味末吉宛書簡(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)、昭和二十年三月八日「什宝并図書疎開先及関係者に付職員総て熟知に関する件」(「往復文書綴」註(2)参照)。

(55) 昭和十九年七月二日に「徳川美術館第二次疎開美術品近日中に一部到着の予定。閲覧室の工事未完成のため一時婦人閲覧室に仮格納入のこと」とある。また翌三日に「名古屋美術館疎開品来る四日発送五日朝到着の予定通知あり。婦人閲覧室へ仮搬入につき、一般閲覧室工事完成まで婦人閲覧中止(今月三十日迄)」とある(「財団法人上伊那図書館三十年史」註(2)参照)。

(56) 昭和十九年七月一日付近藤真太郎より鈴木家令宛書簡には以下の通りある
「什宝疎開関係書類」註(2)参照。

一、図書館の間仕切り化工事は現場にては未着手の由に候、何れ他の所にて木取り作業中のこと、は考へらるゝ、森川氏先発の爲め会ふこと能はざりしを以て作業の進捗程度は不明なりと

一、図書館婦人閲覧室は長さ約四間半余、約二間半位の大きさあるに、入口の幅約二尺五寸位に候へは、其れ以下のものにあらずは収容し得ざる由に候、又此室の机、腰掛等は未だ其俵なるも、之は何時にても他の場所へ片付け得られるへしと

(57) 昭和十九年七月四日付美術館主任より総務部御中「疎開什宝積込に関する件」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(58) 昭和十九年七月四日、五日「伊那町日誌綴」(註(2)参照)。

(59) 昭和十九年七月三十日付美発第六八号報告「第二回疎開什宝品名簿」、八月十二日付美術館主任より総務部御中「第二回疎開什宝の残部、輸送に関する件」(以上二件「什宝疎開関係書類」註(2)参照)、八月十五日、十六日「伊那町日誌綴」(註(2)参照)。

(60) 一月二十三日の空襲では爆風で大曾根邸雨戸や硝子障子などが離脱、破損。三号倉庫扉も爆風で戸締りが出来なくなった(「御用留」註(2)参照)。

(61) 昭和二十年一月二十四日付美術館主任・名古屋別邸主任より総務部・本邸庶務課御中「美発第三号 第三回什宝疎開に関する件」(「什宝疎開関係書類」・「往復文書綴」以上二件 註(2)参照)、昭和二十年一月二十七日「美発第四号 第三回輸送に関する件」(「往復文書綴」註(2)参照)、昭和二十年一月二十七日付美術館主任より総務部御中「美術館第三回疎開什宝格納に関する件」(「什宝疎開関係書類」・「往復文書綴」註(2)参照)、『財団法人上伊那図書館三十年史』(註(2)参照)。

(62) 五月十一日付鈴木信吉より近藤真太郎宛書簡で必要があればさらに疎開させるかとの提案に対しての返答として「什宝は重要なものは既に疎開を完了し、一段落と相成居り、目下名古屋に現存中のものは、輸送するに困難なる、多くは大型物(初音調度中の書棚、机等)のみに候、之を疎開致すすれば伊那町図書館

及び三澤倉庫は格納余地なきため、別に安全なる格納場所の選定を要すべく候、又残存什宝(大体美術館としては第三流以下のもの)を伊那町へ出張する度毎に現送するとせば、目下列車内人の手荷物等万事輻輳せる関係上、客車内へ荷物を持たむことは頗る困難なるのみならず、輸送途中盗難の憂へある現状に鑑み、且又伊那町図書館格納の余地なきため、せいぜい小型一、二点の程度に留り可申能率の上らざる事と存候」と返答している(昭和二十年五月二十二日付近藤真太郎より鈴木信吉宛書簡「往復文書綴」註(2)参照)。

(63) 昭和十九年九月四日、十日、上伊那図書館昭和十九年度及び昭和二十年年度日誌(「財団法人上伊那図書館三十年史」註(2)参照)。

(64) 昭和十九年十月六日・七日、昭和二十年二月二十八日上伊那図書館昭和十九年度及び昭和二十年年度日誌(「財団法人上伊那図書館三十年史」註(2)参照)。

(65) 東京産業大学(現在の「一橋大学」)のギルケ文庫、メンガー文庫等の疎開について、一橋大学附属図書館学術情報課林哲也氏及び上伊那創造館学芸員濱慎一氏の御教示を受けた。

川崎操「本のお守りで四十年」(「一橋大学附属図書館史」一橋大学 一九七五年十月 一三五頁～一五〇頁)。

「学園史」1951(「一橋大学の歩み―キーワードで知る学園史」(平成二十一年度一橋大学附属図書館企画展示) 一橋大学附属図書館 二〇〇九年十月 五頁)。

尚、『財団法人上伊那図書館三十年史』(註(2)参照)によれば昭和二十年一月十三日に同文庫疎開の最初の依頼があり、二月十一日に蓬左文庫主任森川と相談の上徳川黎明会側は事務室として使用が決定していた婦人閲覧室の譲渡を決定、三月十一日婦人閲覧室にメンガー文庫が格納、三月三十一日四階参考室にギルケ文庫が格納された。終戦後進駐軍占領下の十一月十七、十八日に両文庫は東京に返送された。

「伊那町日誌綴」(註(2)参照)にも二月十一日の相談をはじめ、疎開復帰までの東京産業大学山口助教授の来館、格納、曝書等が記録される。

(66) 上伊那図書館昭和十九年度及び昭和二十年年度日誌(「財団法人上伊那図書館三十年史」註(2)参照)。

(67) 昭和二十年七月五日付森川より鈴木信吉、五味末吉宛書簡(「什宝疎開関係書

類」(註(2)参照)、二月十六日「伊那町日誌綴」(註(2)参照)。

此度着任以来、伊那町飛行場ニテハ練習機一台モ飛バズ、今朝始メテ戦闘機数飛ビ居タリ、聞ク所ニ寄レバ、当地ノ飛行場モ改メテ陸軍ノ基地トナリ、工事ヲ改修シツ、アリトノ説アリ

同 五月二十二日(火)

大萱ニ中島飛行機製作所起工セラレタリト云フ、伊那町ヨリ直径四キロ位ナランカ? 飛行機組立工場ニシテ出来上リノ機ヲ其地点ニ作ラレタル、活走路ヨリ飛行サセルトノ事ナリ、伊那町空襲ノ実現ハ確實トシテノ考慮ヲ要ス

(68) 昭和二十年五月二十三日「伊那町日誌綴」(註(2)参照)。

図書館防空計画ニ就テ中村司書ト打合せ、夜中木工会社中村専務宅ヲ訪問、計画ニ就テ協力ヲ乞フ

「財団法人上伊那図書館三十年史」(註(2)参照)にもこの打ち合わせの他、森川が天井裏に這入るなどして図書館構造の強度を確認したことが記されている。

(69) 「伊那町日誌綴」には図書館宿直が開錠したままに不在であったことが何回か記録され、また連絡がないままに開錠しないこともあった。緊急時に対応する必要性から徳川黎明会職員が宿直することを決めたとされる。また伊那への往復切符は徳川美術館では名古屋駅に毎回依頼文を送り、発行を依頼していた。名古屋では切符の手配がついていたが東京では入手が難しかったようであり、蓬左文庫森川は名古屋に切符を何度か依頼している他、七月伊那入りの列車切符の手配がつかなかったのか目白から自転車伊那へ向かった(昭和二十年七月五日付森川より鈴木信吉、五味末吉宛書簡「伊那町日誌綴」註(2)参照)。

(70) 昭和二十年六月十九日付森川鉉二宛「証明書」に「右者今回長野県上伊那郡伊那町に疎開せる蓬左文庫の処理の為、伊那町勤務を命じたり、右証明す」とある(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。また美術館野田芳太郎からは昭和二十年七月三日付五味末吉総務部長宛書簡に「去十八日付御辞令難有拝受仕候、以上は森川殿と協力致し一層注意管理可致候」とある(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(71) 昭和二十年五月二十九日に「扇子屋ニテモ配給物僅少ナル為、昨年来、来泊

者ヨリ一食分一合二尺宛ノ米ヲ持参セシメ居タルガ徳川家ノ者ニ対シテハ出来ル限り便宜ヲ与ヘ呉レタルガ、来月ヨリハセメテ米一食分一合ニテ宜シキ故、持参セラレタシト申シ出デタリ」とある(「伊那町日誌綴」註(2)参照)。昭和二十年六月十七日付美術館より総務部御中「伊那町出張員食料に関する件」では家庭でも一日一人米二合一勺の配給であり、「今月は半分以上代替品(大豆、芋切、パン等)を交付せられ米支給は非常に少な」く、出張員に米を持参させることは到底困難としている(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

昭和二十年七月二日森川は三澤倉庫近隣に宿直する場所を借りられるかどうかの交渉を行い(「伊那町日誌綴」註(2)参照)、五日に鈴木と五味に手紙で報告している。その中で食糧事情に関して「目下伊那町にては、自家の畑を持たざる者は自炊して生活することは絶対に不可能なり、疎開者は住居を得ても食料入手困難却しつゝあり」、「野田氏の食事は漸く小生の親戚に事情を明して当分世話を頼む事とせり」としている(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。七月十一日森川は扇子屋旅館を引き上げ十八日から館内で宿直を開始した。森川は長野県内近隣にくつもの親戚がおり、出身がこの附近であったことを推測させる。美術館野田は七月十日伊那に赴任したが、二十八日野田の一宮の家は全焼した。八月一日家族は野田を訪ねて図書館に来館、五日から伊那の西町山寺宅に家族で間借りして過ごした(昭和二十年八月三日、五日、六日「伊那町日誌綴」註(2)参照)、昭和二十年七月十五日付美術館主任より総務部御中「野田書記来名報告の件」(「往復文書綴」註(2)参照)。

(72) 昭和二十年九月二十二日付総務部より伊那在勤森川鉉二、野田芳太郎宛書簡(「什宝疎開関係書類」(新財団史10023財団総務部管理))。

(73) 九月二十五日野田は伊那北日本通運営業所を訪ね貨物列車指定取扱、付添人等に関する鉄道省の手続を行うよう依頼している(「伊那町日誌綴」註(2)参照)。この時点で大曾根駅は貨物を取り扱っておらず、千草駅に発送の予定となっている。同内容は九月二十六日付森川、野田より鈴木、五味宛書簡として伝えられる(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。九月三十日鉄道省より認可(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)、美術館との発送打ち合わせの為十月三日野田は帰名、五日に伊那に戻った(「伊那町日誌綴」註(2)参照)。

(74) 十月十三日午前八時日本通運が荷馬車を引き連れ来館、伊那北駅で午前に一輛、午後に一輛、計二十三個の荷物が積み込まれた。十四日に野田は名古屋に向かい、十五日に荷物は大會根駅に到着、手車五輛二往復で美術館に運ばれ、徳川家新倉庫に格納された。十月十三日、十四日〔伊那町日誌綴〕註(2)参照。昭和二十年十月十五日付美術館主任、名古屋別邸主任より総務部、本邸庶務課御中〔什宝疎開関係書類〕註(2)参照、伊那野田より美術館宛電報〔往復文書綴〕註(2)参照。第二回返送の二十六個は昭和二十年十月十八日伊那町駅にて大型貨車二輛に積載、二十日午前九時に大會根駅に到着九時半より積卸を開始し、手車四輛二往復で美術館に運搬、美術館と徳川家新倉庫に格納された(伊那森川より美術館宛電報〔往復文書綴〕註(2)参照)。

(75) 昭和二十年十月十九日付野田より総務部御中「上伊那図書館へ進駐軍駐屯の件」〔什宝疎開関係書類〕註(2)参照。

唯今(十九日午前十一時三十分)亜米利加進駐軍將校一名通訳及伊那警察署長財団法人図書館へ来館せられ本館各処検査の上(当方疎開品には一切触れず階下の備付器具等二階へ移し階下全部を明渡されたき旨の申入有之候、期日に附ては何等明示されさるも近日中なる事勿論に候、尚ほ、炊事等の可能なるや否やに付ての問答より推究ふするに少人数の駐屯と存られ候追て警察署員の談によれば、本日の検査は準備検査にして明日本検査ある筈に候由、当方疎開品返送は来る十月廿三日第三回出発の予定に御座候(是れて名古屋よりの分は終り)東京よりの分は本月末に相成かと存候、右御報告申上候

(76) 昭和二十年十月十九日付伊那図書館野田より総務部宛電報(什宝疎開関係書類)〔往復文書綴〕以上二件 註(2)参照。

明日図書館へ進駐軍来る、荷物残り三澤へ移す予定 野田

電報は電話が通じない場合に使用していることから、東京―名古屋に電話連絡がとれない状況であったと推測される。

(77) 『財団法人上伊那図書館三十年史』(註(2)参照)。

(78) 昭和二十年十月二十三日野田より総務部御中葉書、昭和二十年十月二十五日付美術館兼名古屋別邸主任より総務部及び本邸庶務課御中「疎開什宝第三回(最

徳川美術館の美術品疎開

後の分)帰着に関する件」(以上二件「什宝疎開関係書類」註(2)参照。蓬左文庫の返送については森川より総務部宛葉書、同電報(以上二件「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。

(79) 「国宝重要美術品の防空施設整備要項」(「東京大空襲・戦災史」編集委員会「東京大空襲・戦災史」第五巻 東京空襲を記録する会 一九七四年三月六六二頁)。

第一、方針

国宝、重要美術品中特ニ貴重ナル御歴代ノ宸翰、勅願ノ建造物等ヲ始メ我が光輝アル国史ノ徴証ナル諸物件ニ対シ速カニ防空施設ヲ実施シ、或ハ分散疎開セシメテ空襲ニヨル被害ヲ最小限度ニ防止スルコトハ啻ニ我が尊厳ナル国体ヲ擁護スルタメノミナラズ大東亜ノ文化建設上必須ノ要務タルニ依リ国宝、重要美術品中其ノ危険地域ニ所在シ特ニ貴重ト認ムルモノニ付緊急防護措置ヲ講ゼントス

第二、措置

一、建造物ニ対シテハ偽装、貯水池、防火防弾壁ノ築造等防護設備ヲ施スコト

二、宝物ニ対シテハ安全ナル地帯ニ分散疎開セシメ収蔵庫等ニ嚴重保管スルコト

三、右諸設備ト共ニ二万一ノ被害ニ備フル為各物件ニ関シ記録、写真及図面ヲ作製スルコト

備考

本要綱中危険地域トハ防空特別地域及京都市、奈良市並ニ其付近ヲ指称ス(80)「国宝及重要美術品の防空施設実施要項」(「東京大空襲・戦災史」第五巻 註(79)参照 六六二頁―三頁)。

二、方法

(一)本防空施設(国ノ所有ニ属スルモノヲ除ク)ハ文部省ノ指示ニ従ヒ関係地方庁之ヲ監督シ、其ノ実施ニ付遺憾ナキヲ期スルコト

(二)本防空施設ニ要スル経費ニ対シテハ国庫ハ其ノ八割程度ノ補助ヲナスコト

三、施設

(一) 建造物ニ対スル防空施設

(中略)

(二) 宝物類ニ対スル防空施設

宝物類ノ防空施設ニ関シテハ文部省職員実地調査ノ上計画ヲ確立スルコト

(1) 分散疎開

分散疎開ハ危険地域ニ所在スル物件中特ニ貴重ナルモノニ付之ヲ行ヒ、所定ノ収蔵庫ニ収納スルコト、尚分散疎開ノ現品取扱ニ付テハ特殊技能ヲ有スル者ヲシテ之ニ当ラシメ且其ノ運搬ニ対シテモ十分注意スルコト

(2) 収蔵庫

収蔵庫ハ安全ト認メル地域ニ現存スル適当ナル倉庫ヲ利用シ、之ニ保管上必要ナル諸設備ヲ施スコト

(3) 収蔵庫及収納宝物類ノ管理

収蔵庫及収納宝物類ノ管理ニツイテハ地方長官コレニ任ジ其ノ常置セル管理人ヲシテ十分之ガ管理ヲナサシムルコト、尚ソノ管理状況ニ付テハ文部省職員適宜実地調査ノコト

(三) 記録作製

万一ノ場合ニ備ヘ文部省ニオイテ実測図及写真ヲ整備シ、且文書謄写等ヲ行フコト

(81) 註(30)参照。

(82) 註(77)、(78)参照。

(83) 昭和十九年一月十二日付文部省教学局發行文書「什宝疎開関係書類」註(2)参照。紙質も保存状態も悪く欠損が激しく判読できない部分がある。

(84) 昭和十九年一月二十日付 徳川黎明会より文部省教学局文化課御中「什宝疎開関係書類」註(2)参照。

(85) 昭和十九年三月二十三日付 徳川黎明会会長徳川義親より文部省教学局長近藤壽治宛書簡「美術館什宝非常搬出書類」註(2)参照。

(86) 三島貴雄「東京帝室博物館における文化財疎開の概要と新出資料について―「翁島疎開日誌」(仮称)の紹介を中心に」(註(30)参照)によれば、昭和十九年四月

五日に文部省教学局長の申し入れにより、館で保管することとなった華族所有の文化財が輸送されたとある。

(87) 文化財保護委員会編『戦災等による焼失文化財』(文化財保護委員会一九六四年)には絵画三点、彫刻十点、工芸七点、書跡六点の二十六点しか掲載されないが、昭和二十一年田中一松は国宝・重要美術品だけで三百点が罹災したと記し『戦災古美術品について』『アトリエ』昭和二十一年九月号 株式会社アルス 昭和二十一年九月、昭和十九年・二十年版『日本美術年鑑』(東京国立文化財研究所編)には罹災美術品として国宝のみで絵画十五点、彫刻十二点、文書典籍八点、刀剣五点があげられる。

(88) 昭和十九年二月十一日付鈴木信吉より近藤主任宛書簡「美術館什宝非常搬出書類」註(2)参照。

(89) 徳川義知は徳川義親長男、後に尾張徳川家第二十代当主となる。財団法人尾張徳川黎明会創立にあたり副会長に就任、昭和二十一年徳川義親公職追放により徳川黎明会会長就任、日本赤十字社常務理事、日英協会副会長などを務めた。東京帝室博物館研究員を昭和十年八月一日拝命美術課所屬、昭和十四年八月二十一日 東京帝室博物館研究員を免ぜられ、同館列品課事務嘱託、昭和二十一年四月願いにより東京帝室博物館事務嘱託を辞している(「徳川義知履歴」尾張徳川家事務所)。

(90) 昭和十八年九月三日付 総務部より美術館主任宛書簡「什宝疎開関係書類」註(2)参照。

防空上美術館什宝格納ノ場所ニツキ当地帝室博物館ノ意見ヲ徴シ研究ノ結果、差当り現在ノ美術館地下室ヲ使用スルニ際シ湿気防止ノタメ高サ一尺五寸程度ノ簀子状ノモノヲ敷クヲ可ト存ジ候ニツキ至急具体的ニ立案伺出相成度候(後略)

(91) 昭和十九年二月三日付渡部信より尾張黎明会会長侯爵徳川義親宛書簡「什宝疎開関係書類」註(2)参照。

(92) 第三次疎開の際に鉄道局に提出された承認願(写)が残されている(「往復文書綴」註(2)参照)。

承認願

一、品名 美術骨とう品 式拾式個
一、車数 有蓋車 二車(ワム一、ワ二)
一、発着駅 大曾根駅発伊那町駅着
一、運搬期間 一月二十六日四五四列車より
右文部省指令により美術品疎開致度候、就而輸送方御承認相成度此段及御願候也

昭和二十年一月二十三日

財団法人尾張徳川黎明会徳川美術館

名古屋鉄道局殿

(93) 「往復文書綴」註(2)参照。

(94) 註(37)参照。

(95) 第二次疎開の梱包について昭和十九年六月二十七日付近藤より鈴木家令宛書簡では「当方荷造りハ大部分ハ完了致居り候へ共、追加ノ分ノ極小部ハ未了ニ候へ共(資材不足ノ為メ)輸送迄ニハ何トカ工夫シ完了スル様努力可致候」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)としているが、六月三十日の続報で「荷造り用不足資材の縄、釘等を日通社へ交渉して融通を受け、著々進捗し、明一日中に完成せしめんと努力致させ居り候」(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)とある。これは日本通運名古屋支社山梨公用課長が融通したようであり、昭和二十年二月二十八日になつて美術館近藤真太郎は「鉄釘の件、早速御返へし申上候はんと存居り候へ共、何分にも現品容易に手に入らず、辛ふして漸く相調ひ申候に付、茲に御返へし申上候」との手紙を残している(昭和二十年二月二十八日付近藤真太郎より日本通運支社山梨公用課長宛書簡「往復文書綴」註(2)参照)。

(96) 昭和十九年七月十六日付美術館主任より総務部御中「荷造用木材(板購入に関する件)」では愛知地方木材会社より檜、榎等三十五石が配給され搬入されたと報告している。しかし「木材は今回都合に入手出来たるも、一般木材の入手は中々困難なるにより、予め森川鉉二氏を煩はし伊那町にて什宝疎開用木箱の大きなものの製作方(実は板材及び釘が入用なり)を依頼しあるが、多々益々弁ずる訳なるを以て依然森川氏に尽力方を御通し置き下され度御願申上候」とある。この配給は六月二十四日付近藤より鈴木信吉宛書簡によれば福島豊氏の格別なる斡旋

徳川美術館の美術品疎開

により県庁に提出、木材配給審議会の審査により査定されたものであるという(「什宝疎開関係書類」註(2)参照)。また昭和十九年十二月二十三日付近藤真太郎より鈴木信吉宛「第三回疎開什宝荷造其他に関する件」によれば、地震により大工、鳶職等が強制的に徴用された為、箱の準備が進まないと報告している(「往復文書綴」註(2)参照)。

(97) 川口朋子「建物疎開と都市防空―「非戦災都市」京都の戦中・戦後」〈プリミエ・コレクション四一〉 京都大学出版会 二〇一四年三月。

(98) 美術品疎開の議論の広がりについては別稿を執筆中である。

(99) 「松本帝国図書館長の談話」(「美術館什宝非常搬出書類」註(2)参照)。筆記された字体から森川による筆記と思われる。須田論文「史料四」註(1)参照はこれに基づくかと思われるが、異なる点があり確証はない。松本喜一については鈴木宏宗「帝国図書館長松本喜一について」(「日本図書館文化史研究会編『図書館人物伝―図書館を育てた二十人の功績と生涯』 日外アソシエーツ 二〇〇七年九月)、同「元帝国図書館長松本喜一著作一覧」(「参考書誌研究」第五十四号 二〇〇一年三月)を参照した。

(100) 森川は昭和十八年十一月二十四日に長野県立図書館の東京帝国図書館貴重本三万冊の収蔵状況を確認しており、また昭和十九年六月二十二日にも長野県立図書館を訪れ、東京帝国図書館が実施する閲覧室間仕切り工事を視察、詳細に記録している(昭和十九年六月二十四日付 森川より鈴木信吉宛書簡「美術館什宝非常搬出書類」註(2)参照)。上伊那図書館閲覧室の間仕切りはこれを参考にして作られたと推定される。

(101) 名古屋職員慰労のため徳川義親も直筆で葉書を送付している。

お城も神宮も東照宮も焼けてまことに残念だ。諸君の尽力で美術館の無事であったことは感謝する。大した奮闘であつたらう。木造の家屋の焼けるのは当然で、処置なし、今更惜しむこともない。諸君の無事を祈つてゐる。一人の怪我も無いやうに注意されたい(昭和二十年五月二十六日付徳川義親より美術館近藤真太郎宛葉書「往復文書綴」註(2)参照)。

本邸庶務課からも美術館と倉庫が災厄を免れたのは「各員奮闘の結果」と書簡と共に慰労金支給の取り計らいが行われている(昭和二十年五月二十一日付「別邸

焼失の際出動各員に慰労金被下の件」「御用留」註(2)参照)。
(102) 昭和十九年一月十五日付美術館主任より総務部御中「陶器類の什宝手当終了に関する件」(什宝疎開関係書類) 註(2)参照)。

〔挿図出典〕

- 挿図1 中部地方建設局営繕部監修『中部地方建設局営繕事業三十五年史』社団法人中部建設協会 昭和六十一年三月
- 挿図2 『大日本職業明細図』東京交通社 昭和十二年 国立国会図書館所蔵
- 挿図3、6 伊那市創造館提供
- 挿図7 「昭和二十年 往復文書綴 徳川美術館」徳川美術館所蔵

〔謝辞〕

本稿執筆にあたり、公益財団法人徳川黎明会会長兼徳川美術館館長徳川義崇氏及び徳川美術館学芸部四辻秀樹氏、原史彦氏、吉川美穂氏に御教示、お力添えいただいた。また文書判読につき並木昌史氏の御教示を得た。上伊那図書館、三澤倉庫をはじめ疎開先の状況については伊那市創造館学芸員演慎一氏に、グルケ文庫、メンガー文庫については一橋大学附属図書館学術情報課林哲也氏より御教示・資料提供を受けた。また挿図については伊那市創造館、株式会社北川組、一般社団法人公共建築協会、国立国会図書館より提供を受けた。ご協力いただきました全員のお名前全てを書きませんが、ここに心より御礼申し上げます。

(総務部 非常勤学藝員)

表2 徳川美術館疎開年表

日付	尾張徳川家・尾張徳川黎明会関係事項	その他	宿直者
昭和16年1月24日		東京帝室博物館で「戦時防空対策として美術品を分散疎開する案」協議開始。	
2月8日	「疎開」文書綴開始、定光寺への疎開を検討。		
2月10日		東京帝室博物館「有事の際の美術品等の処置に付いて伺」大臣宛提出。	
3月8日	疎開のため定光寺工事を竹中工務店に依頼することと決定。		
4月26日	竹中工務店に工事発注。		
5月25日	美術館疎開品目録完成、総務部に送付。		
6月3日	美術館疎開品目録美術館に返送。		
8月15日		東京帝室博物館館蔵品中の最優秀品並びに法隆寺献納宝物の一部を奈良帝室博物館へ移送する宮内大臣決済を得る。	
8月18日～11月8日		東京帝室博物館第1次疎開(奈良帝室博物館、正倉院事務所)。	
9月18日	搬出準備荷造予定美術品目録(第1次、第2次)作成。		
10月14日	第1次疎開美術品荷造完了。		
11月22日	定光寺は湿気を免れないことから疎開品の内容を再検討する必要があるとの記録あり。		
昭和17年7月18日～		東京帝室博物館第2次疎開(多摩浅川非常倉庫)。	
昭和18年7月～		東京帝室博物館第3次疎開(多摩浅川非常倉庫)。	
7月20日	特別貴重什宝選定。		

9月3日	美術館地下室への美術品待避開始。定光寺疎開の検討再開、湿度計測開始。		
9月18日	10月1日より美術館閉館指示。		
10月1日	徳川美術館閉館。		
10月5日	徳川美術館、「貴重什宝保護措置要項」作成。		
10月15日	「貴重什宝保護措置要項」認可。		
10月22日	定光寺夜番候補者取調及び追加工事開始。		
11月24日	森川、蓬左文庫貴重書疎開について上伊那図書館から内諾を得る。家令鈴木信吉は美術館主任近藤真太郎に同館に美術品も疎開させることを提案。		
12月14日		「国宝重要美術品防空施設整備要項」閣議決定。	
昭和19年1月4日	蓬左文庫閉鎖。		
1月12日		文部省教学局、国宝保存状況を問い合わせ。	
1月14日 15日	加藤春二、美術館陶器梱包。		
1月24日		「国宝及重要美術品ノ防空施設実施要項」公布。	
1月20日	徳川黎明会、文部省教学局に国宝は防空設備ある施設にて保管と返答。		
1月25日	美術館、国宝・重要美術品認定品目録作成。		
2月3日	東京帝室博物館渡部信、徳川義親宛書簡。		
2月11日	家令鈴木信吉、近藤に渡辺信の書簡を送り、速やかに美術品を輸送手配するよう指示。		
2月13日	美術品第1次搬出荷物11個梱包完了。		
2月15日	美術品第2次搬出目録及梱包容積報告。		
2月17日	美術品第1次搬出企画案。		
3月16日	美術品第1次搬出日程決定。		
3月19日	美術品第1次搬出(計11個) 、翌朝伊那町駅に到着、図書館書庫に格納、上伊那図書館司書中村弥紋太を黎明会職員に囑託。		3月22日～ 4月2日 近藤真太郎
3月23日	文部省教学局へ第1次輸送報告、また今後の輸送においても貨車一両貸切を認める文書の交付を依頼。		
3月25日	扇子屋旅館を宿直宿泊所として協定成立。		
3月31日	蓬左文庫貴重書第1次搬出(計80箱) 、翌4月1日午後3時半伊那町駅に到着、図書館収蔵庫に格納。		
4月14日	五味常務理事、名古屋より豊橋経由で伊那に到着、翌日美術品格納場所として借用予定の2階閲覧室を検分、帰京。		4月2日～16日 熊沢五六
4月18日	大工棟梁来館、仕切工事の交渉。		4月16日～30日 野田芳太郎
5月1日	森川は伊那木工会社を訪ね、閲覧室仕切を依頼。また近隣民家倉庫借入検討を開始する。		4月30日～ 5月17日 森川鉦二
5月3日	伊那町山寺の福沢を訪問、倉庫借入につき懇談。		
5月9日	森川、書庫の中の疎開箱積替。		
5月11日	暴風雨のため事務室南寄り雨樋から雨少々にじみ出るが、問題なし。図書館員池上に三澤良信の紹介を依頼する。		
5月15日	三澤後見人の家に行き、倉庫借入を交渉、翌日倉庫視察。		
5月30日	三澤倉庫を大工と共に検分。		5月17日～31日 熊沢五六
6月1日	徳川生物学研究所内に第七陸軍技術研究所分室設置(～昭和20年8月15日)。		5月31日～ 6月15日 野田芳太郎
6月11日	野田は伊那木工会社を訪問、三澤倉庫抜軒工事は今月中完成、疎開図書館は今月20日または25日までに発送、閲覧室間仕切り工事は来月早々着手、中旬完成予定との回答を得る。		

6月16日	森川は図書館長、中村司書、木工会社専務宅を訪れ徳川家からの中元(干物)を贈る。		6月15日～30日 森川鉦二
6月22日	森川は長野県立図書館を訪問、帝国図書館疎開図書を格納する閲覧室仕切り工事を視察。		
6月24日	閲覧室間仕切り落成まで一時的に婦人室または児童室に格納保管を依頼、許可を得る。		
6月25日	閲覧室完成前に図書館内婦人閲覧室を一時的に借用し、美術品第2次搬出予定荷物の内、搬入可能な大きさの22個を輸送する方向で検討。		
6月26日	伊那木工会社に美術品疎開用箱を注文。		
6月27日	蓬左文庫貴重書疎開箱、伊那木工会社で完成、35箱本日発送、残り35箱は翌日発送、残り40箱は今月中に発送予定。		6月30日～7月15日 熊沢五六
7月4日	美術品第2次第1回搬出(計22個) 、翌朝伊那町駅に到着、上伊那図書館婦人閲覧室に格納。		
7月11日～13日		東京帝室博物館第4次疎開第1回 (翁島高松宮別邸)。	7月15日～31日 野田芳太郎
7月16日	間仕切り工事材料館内搬入、工事開始。美術館では愛知地方木材会社から疎開美術品荷造用木材の配給受領(檜、楨等35石)。		
7月27日	美術品第2次搬出予定の残り(16個)を8月15日搬出決定。		
7月30日	美術館第3次疎開美術品目録作成。		
8月4日	蓬左文庫貴重書第2次搬出(計80箱) 、6日午前5時伊那町駅に到着、図書館新聞閲覧室に格納。		8月1日～16日 熊沢五六
8月7日	三澤倉庫床簀の子張り工事完成。		
8月12日	図書館閲覧室内間仕切り工事完成。		
8月15日	美術品第2次第2回搬出(計16個) 、翌朝伊那町駅に到着、上伊那図書館閲覧室内に新設された新収蔵庫に格納。		8月17日～20日 熊沢五六
8月28日	蓬左文庫貴重書第2次到着荷物を三澤倉庫に運送馬車5台で移動。		8月20日～9月3日 森川鉦二
9月1日～5日		上伊那図書館、海軍志願兵試験場となり閲覧休止。	9月3日～15日 野田芳太郎
9月4日～10日	野田芳太郎刀剣手入。		
9月18日	美術館第3次疎開美術品格納場所を検討。		9月15日～30日 熊沢五六
9月20日	三澤倉庫新規借入部分点検。		
10月6日～7日	森川、蓬左文庫第1次疎開荷物を開封、状況確認。		9月30日～10月16日 森川鉦二
10月15日	新規格納室の西側入口扉が開閉困難となったため修繕。		10月16日～31日 野田芳太郎
11月3日～5日		上伊那図書館3階講堂で伊那美術展覧会開催。	10月31日～11月10日 熊沢五六
11月11日～13日		上伊那図書館3階講堂で戸田祐暉(1921-50)日本画展覧会。	11月10日～20日 森川鉦二
11月20日～23日		東京帝室博物館第4次疎開第2回 (多摩浅川非常倉庫)。	11月20日～30日 野田芳太郎
11月28日	三澤倉庫3階間仕切り工事着手。		
12月1日		上伊那図書館の夜間閲覧中止、開館時間は9時から17時となる。	11月30日～12月10日 熊沢五六
12月3日	美術館迷彩壁塗終了、屋根遮蔽工事は骨組終了、竹の搬入が遅れる。		
12月7日	13時40分昭和東南海地震。美術館一部被害あり。この日から警戒警報発令の記事あり。	伊那町も強震に見舞われたが上伊那図書館に被害なし。	
12月10日		名古屋空襲開始。	
12月12日	三澤後見人、木工会社に歳暮を渡す。森川、小澤川に転落。		12月10日～20日 森川鉦二
12月13日	上伊那図書館理事会で尾張徳川黎明会重要品疎開についての館一部の貸与が報告される。		

12月27日 ～1月5日	休館中も宿直職員は毎日図書館に出勤。	上伊那図書館は年末年始休館。	12月20日～31日 野田芳太郎
昭和20年1月	蓬左文庫附属徳川林政史研究室研究資料疎開(木曾教育会館)。		12月31日～ 1月10日 熊沢五六
1月13日	3時38分三河地震。愛知県下では2300人余が死亡、大曾根別邸、美術館には被害なし。		1月10日～20日 森川鉦二
1月14日	上伊那図書館へ図書寄贈の件につき中村司書と打ち合わせする(1月16日図書館理事会にて議決の予定)。		
1月23日	空襲により大曾根別邸に初被害。		1月20日～31日 野田芳太郎
1月24日	第3次搬出予定日決定。		
1月26日	美術品第3次搬出(22個) 、翌27日伊那町駅に到着、上伊那図書館新設収蔵庫に11個、三澤倉庫に11個格納。		
2月10日		伊那町上空を敵機が飛び、旭村澤底の山中に爆弾投下、以降14日、15日と敵機目撃。	2月10日～20日 森川鉦二
2月11日	森川、中村司書協議の上、徳川黎明会疎開関係事務室として貸与予定となっていた婦人閲覧室を東京産業大学(現在の一橋大学)に譲渡する事を決定。		
2月18日	8時半頃新設収蔵庫東側のラジエーターから蒸気噴出、荷物には別条ないが修理、午後雪解の水が3階東北炭の壁から点滴、バケツで水受けするが飛沫が飛ぶ恐れがあるので荷物1個を移動。		
2月20日	午後、新設収蔵庫東側壁より雪解水点滴。		
2月24日	好天に恵まれ図書館屋上の1尺余の積雪から雪解のため、新設収蔵庫東北角より雫が1分間に3、4滴落ちる。図書館に善処を求める。		2月20日～28日 野田芳太郎
2月27日	新設収蔵庫雪解雫あり、図書館屋上の除雪除水作業を図書館員中村、池上、平沢が翌日にかけて行う、その後点滴なし。 徳川義知より宮地太市に依頼していた疎開用荷箱が、愛知県製箱工業統制組合より両3日で到着するとの通知あり。		
3月10日	B29来襲百数十機来襲のため、伊那に向かおうとしていた森川は乗車不能になる。目白駅長の好意で10時半新宿発に乗車する。		2月28日～ 3月10日 熊沢五六
3月11日		東京産業大学荷箱120個到着、婦人閲覧室に搬入。	3月10日～20日 森川鉦二(家族逝去の為森川帰京、21日は宿直欠員)
3月16日		上伊那図書館裏庭園へ防空壕築造開始。	
3月18日	森川、上伊那図書館屋上、3階講堂の天井裏などに這い入り、焼夷弾落下の場合の処置を研究。		
3月25日	名古屋空襲、美術館建物に被害あり。		3月22日～31日 野田芳太郎
3月27日		上伊那図書館北庭に町内用待避壕(20人入、3か所)築造開始、4月8日完成。	
3月31日		東京産業大学疎開荷物(ギルケ文庫)120個到着。 上伊那図書館に横須賀海軍病院より海軍傷病兵300名の療養所として借入れたいとの申し込みあり。	
4月6日	森川は東京での用務多忙につき、宿直に近藤を加えて4名当直体制へと変更するとの総務部指示。		3月31日～ 4月12日 熊沢五六
4月7日	空襲のため、大曾根邸役宅全棟全・半壊。		
4月10日		陸軍農耕隊(約13000名)進駐のため、本部事務所として上伊那図書館閲覧室、新聞閲覧室を借り受けるとの申し込みがある。当分貸与はやむを得ないとのことで承諾すると連絡を受ける。	

4月15日	目白本邸・蓬左文庫周辺空襲により多くの被害を受ける。		
4月17日		第一海軍衣料廠研究室より上伊那図書館講堂、閲覧室、児童室、新聞室貸与依頼、内諾。23日ミシン45台講堂に搬入。	4月12日～20日 森川鉉二
4月21日		東京帝室博物館第五次疎開。館内に残っていた文化財及び浅川非常倉庫に収蔵していた文化財を高松宮別邸、常照皇寺、弓削旅館、大森彦四郎邸内倉庫、小田島閑二邸内倉庫に疎開。	4月20日～30日 野田芳太郎
4月25日		東京産業大学学長高瀬荘太郎、同山口助教授、武井方介、上伊那図書館に来館。	
4月27日		東京方面出身女子挺身隊50名上伊那図書館に来館、衣料廠製作事業開始。28日図書館入口に「第一海軍衣料廠伊那工場」の看板が掲げられる。	
5月4日		上伊那図書館新聞室にミシン30台搬入、一般閲覧室も近く学校工場となるため5日より閲覧中止。	4月30日～ 5月10日 熊沢五六
5月9日		上伊那図書館一般閲覧室にミシン40台搬入、11日より作業開始。	
5月11日	総務部指示により近藤、伊那へ出張。		
5月14日	名古屋大空襲、名古屋大曾根にあった別邸、徳川園等の大半が焼失。館職員の努力により美術館と倉庫3棟のみ焼失を免れる。		5月10日～19日 近藤真太郎
5月16日	森川、総務部指示により名古屋に向かう途上、伊那を訪れ一泊、17日名古屋に向かい、19日伊那に戻る。		
5月20日	伊那に滞在していた近藤帰名。		
5月22日		大萱に中島飛行機製作所が起工、飛行機が出来次第飛行場から飛び立つとのことで、伊那町空襲は確実と森川は憂慮。	5月19日～31日 森川鉉二
5月23日	森川は図書館防空計画について中村司書、伊那木工会社中村専務と相談。		
5月29日	扇子屋旅館より配給僅少のため1食1合の米を持参するよう申し出がある。		
6月	徳川生物学研究所分室を金沢市中学校内に設け、研究器具を疎開、また一部研究員も出張、滞在(～昭和20年10月)。		5月31日～ 6月10日 野田芳太郎
6月13日		上伊那図書館玄関前に公共待避所として防空壕をつくることが決定。	6月10日～20日 熊沢五六
6月18日 19日	森川、野田に伊那町勤務を命ずる。		
6月25日	近藤逝去。		6月20日～ 7月1日 野田芳太郎
7月1日	森川は自転車で目白から伊那に到着、伊那木工会社に図書館防空施設及び黎明会宿直室設備を依頼。		7月1日～10日 森川鉉二
7月2日	三澤倉庫監視のため、倉庫前判事宅2階空室を借用交渉。		
7月10日	野田、伊那に赴任。	上伊那図書館にも建築物偽装のためコールタールが配給される。	7月11日～ 10月28日 森川鉉二 野田芳太郎 (宿直2人滞在中に変更、途中交代で東京・名古屋に出張)
7月28日	野田の家族の疎開先(一宮)焼失、8月1日家族来伊、図書館宿直室に仮泊する。		
8月5日	野田、西町山寺の北間を借り受けることに決め、荷物を運搬。		
8月15日	終戦		
8月23日		戦争終結に伴い上伊那図書館の海軍第一衣料廠閉鎖、荷物の引き上げ開始。	
9月1日 2日		海軍衣料廠ミシン搬出、設置した電燈電源も取り外し終了。	

9月4日		海軍衣料廠学徒30名来館、工場後片付、大掃除。	
9月6日		伊那女学徒30名上伊那図書館敷地内の待避壕2か所の取壊作業に従事。	
9月22日	伊那町保管の美術品・貴重書を名古屋・東京に復帰指示。		
9月29日	森川は三澤宅を訪問、疎開荷物近日引上げを通知、上伊那図書館には10月3日通知。		
10月2日		上伊那図書館館内閲覧再開。	
10月4日		東京産業大学職員、疎開図書曝書の為に上伊那図書館に来館するも湿気を帯びていず、曝書の必要なし。	
10月13日	美術品第1次返送(23個)、15日大曾根駅に到着、新倉庫に搬入。		
10月18日	美術品第2次返送(26個)、20日大曾根駅に到着、美術館及び新倉庫に搬入。		
10月19日	図書館館内に残る美術品・貴重書を全点三澤倉庫に移動。	米兵将校、上伊那図書館に来館、明日より全館進駐接收を通知。	
10月20日		進駐軍70名来館、上伊那図書館接收。	
10月23日	美術品第3次返送(22個)、25日大曾根駅に到着、美術館倉庫に搬入。		
10月28日	貴重書、三澤倉庫より搬出(160箱)、30日蓬左文庫に搬入。 森川帰京、野田帰名。		
11月1日	森川・野田主催で伊那の越後屋で上伊那図書館員との慰労会が開催される。		
11月5日		三澤倉庫に搬出していた書架1台上伊那図書館に戻る。	
11月10日	残務処理終了、森川帰京。		
11月17日 18日		東京産業大学図書、進駐軍承諾の下、上伊那図書館より搬出返送。	
昭和21年1月3日	徳川義親会長辞任、徳川義知が就任。		
2月1日	家令鈴木信吉、家扶五味末吉をはじめ家扶以上の家職は総辞職。		
3月24日		東京帝室博物館再開(日本風俗展)。	
7月		東京帝室博物館疎開文化財復帰完了。	
9月	財団名称を財団法人黎明会に変更。		
9月14日	目白本邸進駐軍により接收。		
昭和22年11月1日	徳川美術館再開(日本文化教室)。		
昭和23年8月	目白本邸内事務所閉鎖。		
昭和27年4月1日	徳川美術館、博物館法公布により愛知県第一号として博物館登録。		

金 鯨 叢 書 第四十六輯 [年一回刊行]

——史学美術史論文集——

平成三十一年 三月 三十日 編集
平成三十一年 三月 三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川 義 崇 誠

発行者

公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950)〇一二番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一

徳川 林 政 史 研 究 所
電話(3950)〇一二番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七

徳川 美 術 館
電話(935)六二六二番(代)

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二

印刷所
株式会社 同朋舎
電話(361)九二二番(代)